
私立白鷺台中学校・生徒会裏日誌

柊 雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立白鷺台中学校・生徒会裏日誌

【Nコード】

N9841P

【作者名】

柊 雪華

【あらすじ】

私立白鷺台中学校は今年創立10周年。

その一風変わった校風は、ひとくせもふたくせもある生徒会メンバーたちの手によるもの。

生徒会メンバーが繰り広げる騒動はもはや日常のひとつ。

バカ騒ぎあり切ない恋愛あり、何よりも彼らにとって大事なものは、生徒会活動を通して得た「絆」だった。

そんな生徒会メンバーの、創立10周年記念の1年を追う、しょーもない青春恋愛友情コメディー。

自サイト」に「より再掲載
http://ame
blo.jp/cocqueIicct

Pre Mission(ちょっとだけ自己紹介

今年創立10周年を迎える私立白鷺台中学校。市街地にあるとは思えないほど緑に囲まれて、そこだけのんびりと時間が流れている、そんな場所である。

さて、ここは私立白鷺台中学校生徒会室である。

入学式まであと1週間ということで、この学校の生徒会役員が合宿に招集されることになった。メンバーは生徒が7人に、顧問が2人。まさに個性派揃いの集団である。

「じゃあまず、入学式に向けてやるべきこと説明するから」と言つて、手元にある資料を読み上げていくのは、議長の佐枝浩一。

4月からは3年生となり、さらに陸上部長距離の超エースである。しかも成績優秀、眉目秀麗…などなど四字熟語のカタマリである彼は、「白鷺中の王子様」との異名まで持つほどである。しかし、一見おとなしそうだが、実はちよつと毒舌だったり、一筋縄ではない魅力がある。

「えっと、まず新入生向けの生徒会だよりの作成、入学式の記念品の介添え、それからマー坊は生徒会長の挨拶考えて、これはもう無条件で確定だから。あと1年教室の飾りつけのレイアウト作つて、放送委員と一緒に学校紹介ビデオの編集もあるから…分担はどうする?」

「なら俺ビデオ編集に回つていい?」

間髪入れずそう言うのは、保坂春樹。浩一の幼馴染であり、大親友である。

合言葉は「気合と根性」な、今時珍しいほどの汗臭い青春を謳歌している男だが、実は生徒会副会長。さらに浩一同様イケメンで、

白鷺台市を中心とした地区の陸上界では非常に名が知れている。ただ、成績は超低空飛行なのが玉にキズといったところか。

「僕もビデオ編集に回るから、じゃあ決まり、アンナ、黒板に書いて」

「はいっ」

ひときわ明るい声で返事をし、黒板に綺麗な字で担当者の名前を書き付けていくのは、書記の藤原杏奈。

彼女も今年から3年生、野球部のマネージャーをしている。実は小学5年のころにオーストリアから帰国したハーフで、今ではすっかり日本人的生活が身についたようだ。ちよつとおつちよちよいではあるが、頑張り屋で素直で、さらに日本人離れた美少女である。

「よし、他に何かやりたいのある？」

「じゃあ私、飾り付けにまわっていいですか？」

ちよこんと手を上げるのは、2年生になる小柴萌美である。

彼女は会計担当で、見た目同様性格も純粹培養のお嬢様そのもの。しかし嫌味なところはてんでなく、みんなによくかわいがられる。また、将来は看護師になりたいということで、傷の手当てや薬についての知識は、生徒会はおろか生徒全員の中でも右に出るものはない。ただしひどい貧血もちなので、鉄分のサプリメントは欠かせないといった一面もある。

「いいよ。あゝでも飾りつけはもう一人欲しいんだよ……じゃあナッツン頼む」

ちよつと意味ありげな視線を「ナッツン」に送り、何事も無かったように浩一は言う。

「先輩！なんでいつもいつもナッツンなんスかあ！？」

などと頬を膨らますのは夏岡祐。彼も2年生で書記、この学校の男子にしては珍しい文芸部員。

文章だけでなく、私服や持ち物のセンスも非常によく、過去何度か雑誌の「カリスマ中学生特集」みたいなものに載ったことがある

ほど。性格はいたって温厚、なはずだが、どうしても「ナツツン」と呼ばれるのは気に食わないらしい。それでいちいち反応するのが面白いので、萌美とは違う意味でかわいがられることが多い。

「いいっていいって。『たすく』より言いやすいじゃないのさ……あ、コウ、あたしは介添えね」

と言うのは、副会長の永井香苗。3年生で副会長、バレー部のエースアタッカーである。

少し茶色みがかったショートボブの髪に、170センチ近い長身さばさばした姉御肌な性格のため、女の子にはかりもててしまうのが悩みである。また、杏奈の大親友で、何をすることもどこに行くにもいつも一緒。趣味は女の子らしくアクセサリー作りで、昨年度の学園祭のバザーに作品を売り出したところ、即日完売してしまったほどである。

「わかった。じゃあ僕はビデオの編集に回るから……アンナは？」

「あたしは生徒会だより。先生直々に頼まれたから」

「じゃあコウ、俺はあ？」

「お前は黙って挨拶考えてろ」

などと一蹴されているのは、白鷺中の第10代目生徒会長、穂積雅弘である。男子バレー部のエースで、自分の考えはしっかり持つ芯の強いやつ。

実家は居酒屋で、暇なときなどはよく店の客の話し相手になったり、客に出す料理を作ったりする。そのためか非常に料理のレパートリーが広く、しかも何を作らせてもハズレが無い。生徒会の合宿では1年の頃から料理番である。

「……まあ、こんな感じだな。じゃあ各自の仕事始めて」

今日は顧問は昼ごろまで会議で来ないから、それまでは生徒だけですべての仕事をこなさなくてはいけない。期限は1週間。

こんなアクの強いメンバーで、果たして入学式の準備作業はちゃんと終わってくれるものなのか……。

白鷺台中学校生徒会役員会、兼10周年事業運営会。
怒涛の1年が、今幕を開けようとしていた。

MISSION1 世渡り上手になれ(語り部:浩一)

放送部のメンバーである石田巽とハル、そして僕の4人で情報処理室、いわゆるパソコンルームに入ってから、はや数時間がたった。僕らの仕事である学校紹介ビデオの製作は目下……停滞中である。とりあえず僕らのやるべきことは、先生たちが撮り集めた映像を集めたCD-Rからそれらを取り込んで、また新しいものを作るというものだ。しかもかなり本格的で、字幕やBGMなんかも入れなければならぬ。にもかかわらず、この遅さはいったいどういうことか。

理由? そんなものは単純だ。出てきた映像を見て、みんなで思い出話に耽っているのだ。

「なあ、そろそろ……」

「うわーありえねー、春樹露出狂!」

「おめえが脱がしたんだろーが!」

彼らが見ているのは去年の体育祭の映像。応援合戦で、応援団員のハルが上半身素っ裸で走り回り、いつものように「ぬどりゃああ!」などと叫んでいる。

「いいからいいから。じゃ、これ入れるよ」

そんなだから、何時間やっても体育祭までしか進んでないのだ。

体育祭は5月。1年の流れを追ったビデオにするはずなのだが、まだ5月ってどうなんだよ……。はあ。

「おまつ、恥晒すんじゃねえ!」

「いつも恥晒してるからいいだろ。じゃ、体育祭はこれでいいから、遠足、だな」

やっと6月、遠足の映像を選ぶ段階になったところで、外からはウエルナーの「野ばら」が聴こえた。俺たちの住む市の時報である。しかも正午。あゝこんなんで間に合うのか? 編集は選ぶのよりやたらに時間食うんだっていうのに。

「遠足は……去年雨で流れて映画のDVD観てたから一昨年のか？なあ巽、一昨年の遠足のやつある？」

「う〜ん……多分ツ力なら分かるんじゃない？ 聞いてく？」

ちなみにツ力ってのは、放送部、そして生徒会顧問の手塚先生のことだ。

「いや今すぐ行け、行ってこい」

巽を追い出したところで、今度は他の映像を引っ張り出してくる。次は中体連の入場行進か……。

「どうだ、できたかあ？」

と思つたら、今一番聞きたくない声、うちの顧問の遠藤熙先生（この名前の字は書きたくないぐらい難しい）の声がしたではないか。まずい、この状況は非常にまずい……。

「ん？巽のヤツどこ行つたんだ？」

眼鏡とスーツのよく似合う27歳の好青年が、隣の準備室から出てきた。彼が噂の遠藤先生だ。なかなかかつこよく優しいので女子生徒からモテモテだが、実は結婚していて子持ちである。

「今ツ……手塚先生のところに行きました。去年の遠足雨で流れたんで一昨年の引っ張り出してくるかって」

「助かるなあ。で、どこまで進んだ？」

「まだまだツス」

「ほお……どれどれ、ん？ ……中体連？ しかもこれ、去年の6月だよなあ？」

「あ、ちよつと待つてください、僕ちよつとトイレ行きたいんで」

僕はタイミングよく言い出して、腰をもじもじさせながらハルと先生の間をすり抜ける。うへへ、ハル、グッドラック！ 後は任せ
た！

「おーい春樹ー？ お前何時間も何手間取つてたんだあ？」

先生の声。おそらくこの直後には先生の得意技「モミ」が火を噴いたことであるう……ちなみに「モミ」とはモミアゲを引っ張ってぐりぐりやるといふ、（坊主頭の野球部員以外の）男子がもつとも

…やべえよ痛えよ死ぬってば、助けるハル、巽！

「けへへ、ざまあみやがれ」

しかし奴らは僕を見て、指差して笑ってるじゃないか。

ちくしょう、さっきの「便所来い」ってセリフ、そっくりそのまま返してやるかな！！覚悟しとけ……ていうか痛いってば！

Mission2 恋する乙女14歳（語り部：杏奈）

合宿場である「青雲寮」に入った後は、とりあえず各自休憩になったんだ。

けど、あたし藤原杏奈には休憩もへつたくれもない。生徒会だよ
りを書く、印刷する、何枚もあるのを束ねる……っていう仕事を遠藤
先生から仰せつかっているのだから。部活紹介、学校紹介がメイン
の生徒会だよりは、手書きで書かなきゃいけない。中体連の成績報
告号とか生徒総会議事録号なら文面と写真をパソコンで編集すれば
いいけど、今回はそうはいかない。

「制服のデザインとか、学校案内図、手書きで書いたほうがわかり
やすいだろ。杏奈なら字も綺麗だし、絵もほんとに上手いからな。
頼んだぞ」

そんな風に先生に言われたら、あたしだって頑張るしかないじゃ
ない。だって、あたしは……。

「もういいもついい！絵描かなくちゃ！」

一人で叫んでから、あたしは白い紙に鉛筆を走らせた。制服はチ
エックの膝丈ジャンパースカートにブレザー、リボンは学年ごとに
色が違って、中にはおっきなセーラーカラーのブラウスでしょ、襟
に校章もつけて、ブレザーは紺色でブラウスの襟は外に出して……
あれ、スクリーンとどこだっけ？

おかしい。持ってきたはずなのに、ない。同じファイルに入れて
たはず、っていうか間違いなく入れてたのに！

「あ……」

一番近くの文房具屋さんでも、歩けば30分だしなあ。早く描い
ちやいたんだけど……そうだ、香苗に自転車借りようかな？

あたしはそう思って、第2宿泊室に足を向けたんだ。あたしたち

が泊まる部屋はそこ。そこならきつと香苗もいるはずだし。

「香苗く？いる？」

って言いながらひよっこり顔を出してみるけど……あれ、いないじゃない。目論見、大ハズレ。

「香苗？」

後ろから聞こえたのはハルちゃんの声だった……ここでも目論見大ハズレ。正直、ハルちゃんにはあんまり会いたくなかったんだ。ああ、あたしってとことん運が悪いんだから！

「ああ、もえちゃんと買出しに行くって言ってたな。二人でチャリ乗ってんの見たぞ。つうかお前の身長じゃ香苗のチャリ乗れねえべ！」

うー……ひどい、いくら私の身長が150センチないからってそこまで言わなくていいじゃない。ハルちゃんはいつもこう。他の子には優しいのに、あたしにはぶっかりひどいことばかり言うんだ。小学生の頃は仲良かったはずんだけど、なんでこんな意地悪になったんだろ？

「もういいよ、遠藤先生に頼むもん」

ほっぺを膨らまして、ハルちゃんにそう言ってやる。そしたらハルちゃんが急に嫌そうな顔したんだ。さっきまではからかい半分のいつもの笑顔だったのに。

「お前ってばいつも先生先生ってよ……」

「だってハルちゃん意地悪なんだもん」

多分これ以上口きいても埒明かないだろうな。やめとこう。

「おい待ってってば、アンナ！」

けど待ってやらない、口もきいてやんない。ハルちゃんなんか嫌いだもん！

そういうわけで、合宿所の前でバーベキューの準備をしてる先生に声をかけてみたんだ。これこれこういう理由があって、ちよつと

文房具屋さんに行きたいんです、もしよかったら送っていただけませんか？ って。

「ああ、なるほどなあ……よし、今から行くか。文房具屋もそんなに早くは閉まらないからな。じゃ、こっちは春樹たちに頼むかあ」

先生は車の鍵をカチャカチャ鳴らしながら、車の方に歩いていく。やった！とりあえずこれで大丈夫、あたしの生徒会だより作りは安泰だ！

「アンナ……」

「おー、春樹、雅弘、ちょうどよかった。俺今から杏奈乗せて文房具屋に行ってくるから、こっちの準備頼む。危ないから俺が帰ってくるまで火イつけんなよー」

ハルちゃんが言い終わる前に先生は用事をハルちゃんたちにさっさと言いつける。さすが先生、あたしのことちゃんとわかってくれる。嬉しいなあ。

「え、先生待ってっつて、俺……」

「はいはいごちゃごちゃ言わないでやれっつての。こいつには生徒会だよりの完成がかかっているからな、こっち優先だろ」

言いながらあたしを車に乗せてくれる。そして先生も車に乗り込んだ。コレでもうハルちゃんたちには邪魔されない、やった

「なんだ、もしかしてまた春樹になんかされたのか？」

車を走らせてから少ししたところで、先生はそう言い出した。先生は優しい。あたしのことすぐくわかってくれるから、なんか嬉しい。

「そうですね……いつつもういじめるんです。今日だって、あたしの身長じゃ香苗の自転車乗れないだろっつて……気にしてるのに」

「ああ……なるほどな。あいつも素直じゃないからな。ホントのトコ杏奈のこと好きなんだろ」

「それにしてもひどいことばかり言うもん」

「アレがあいつのキャラだろ。いや、あいつだけじゃないさ。男っつてもんはいつまでも子供でな。特にあいつはまだ発展途上だしな……」

…好きな子のこといじめて気引くつてなあ。ただなあ、あいつにはちよつとは思いい知らせなきゃな」

「そうですねよ……ホントに」

ほっぺを膨らましてから、その空気を押し出すみたく、ため息をつく。これが、ハルちゃんに関わることがあったときのあたしのクセになっていた。そうこうしているうちに、車は文房具屋についてしまう。楽しい時間って、なんでこんなに早く流れていっっちゃうのかな。ずーっとこうしていられたらいいのに。

そこでトーンを買って帰ると、もうバーベキューの準備はできて、香苗ともえちゃんも帰ってきてた。

「あーっ、先生ってばどうやってアンナ口説いたのよー！」

香苗の第1声がそれなんで、あたしは焦ってしまう。

「ちよつと香苗、違うってばあ」

「ばあか違うつての」

先生が豪快に笑う。見た目ちよつと優男ばいんだけど、性格はこんなだ。でも細かいところによく気がつくし……そういうところが好きなんだよなあ……あつ！しゃべっちゃった！

「……」

ハルちゃんは相変わらず機嫌が悪そう。でもあつちが悪いんだもん、自業自得ってやつでしょ？

「とりあえずアンナ、それ置いてきなよ。早くしなきゃあたしら全部食べちゃうからね？」

香苗にわき腹をつつつかれ、あたしは急いで青雲寮の部屋に買ってきたものを置きに行った。ついでに借りてた冷蔵庫から、合宿前に作ったザツハートルテを取り出す。バーベキューのあとにみんなに食べてもらうデザート。昔お母さんから作り方を教わった、あたしの一番得意なお菓子なんだ。

先生も、みんなも、喜んでくれるかなあ。その一心で作ったケーキ。

「アンナ、まだー？」

「先輩またザッハートルテ作ったんですよー、オレ早く食べたいですよ」

「お、杏奈が作るケーキいつも絶品だからなあ」

みんながそれぞれ好き勝手なことを言いながらも、あたしを待たせてくれている。

ザッハートルテをひっくり返さないようにしながら、あたしは青雲寮のドアを開けた。

「待たせてごめんねー！ ケーキもちゃんと作ってきたから！」

MISSION3 〈運命はそこかしこ〉(語り部：雅弘)

……まったく、ここ数日はろくに眠れたもんじゃない。

毎度のことながら、同室のハルとナツツンがなかなかコウと俺を寝かせてくれないのだ。といっても別に怪しい意味ではなく、ウノ、トランプ、花札、どこから出したのかよくわからない人生ゲーム、しまいには枕投げ……どこの修学旅行だ、とため息のひとつでもつきたくなってしまう。

それに、俺には大事な仕事がある。生徒会長の毎年の義務である、入学式での新入生歓迎の挨拶だ。原稿はできているし、遠藤先生からも合格をもらった。ただ、ハルとナツツンの奴らが練習させてくれないどころか寝かせてもくれないので、本番に間に合うかとなると甚だ疑問でならない。

生徒会室では相変わらずアンナが生徒会便りをホチキスで留める作業を繰り返しているし、他の3年男子メンバーは例によって放送委員と一緒にビデオ作成。確か今日は上映会だったはずだ。あいつらのセレクトだから恐ろしいものが出来上がりそうだが、そこは遠藤先生のフォローに望みをかけるしかない。

ナツツンと萌美ちゃんは相変わらずくつつきそうでくつつかない雰囲気ですり花をひたすらに作っているのだろう。3年生の生徒会役員全員一致で、みんなあの二人をくつつけるのに必死なわけだ。

残るは香苗だが、あいつは本番での介添えぐらいしかやることがないので、大体はアンナのサポートに回っている。さすがは大親友同士、息はピッタリだ。

「……………」

で、結局俺は、こうして生徒会長専用の馬鹿でかい机に向かつて「新入生歓迎の挨拶」を黙読している。しかしここでは到底集中できそうにない。がさがさがさがさ、がちゃん。分厚い生徒会便りをホチキスで留めるのも一苦勞のようだ。

「なあ、香苗、アンナ、手伝うー？」

挨拶文の書かれた紙に目をやったまま、声だけで尋ねるが、

「大丈夫、あたしらだけで十分間に合うから」

間髪入れずに香苗からの返事。なんだよ、じゃあ俺ここにいる意味ねえじゃん。

「つていうかさー雅弘、あんた声出ししなくてもいいの？」

「声出ししようにも講堂使えねんだよ、ビデオの上映会だとさ」

「じゃあ、礼拝堂は？あそこなら誰もいないから練習になるよ。よく声響くし鍵開いてるはずだから行ってみたらいいんじゃないかな」

そう、我らが白鷺台中学校は私立のミッション系中学。巨大な敷地内にこれまた巨大な礼拝堂がある。そこならわざわざ邪魔しに来るような奴はいないだろう。たとえ、それがハルであろうとも。

「え、いいのかよ？」

「いいんじゃない？ 遠藤先生から聞いたから大丈夫だと思うよ」

さすが香苗、良くも悪くも手が早い。

「じゃ、お言葉に甘えて行ってくる。昼にはコンビニでメシ買って戻るから」

机の下から学校指定の鞆を引きずり出し、それに挨拶文の紙を適当に放り込む。しわにさえならなければ問題ないし、俺の鞆はそもそもハルのそれのようにごちゃごちゃと汚くなんてないから心配ない。

「え、じゃああたしらにも何か買ってきてよー」

「マー君ばっかりずるいよー」

……やれやれ、俺が「コンビニ行く」っつーといつつもこいつらは。結局香苗には激辛チキン、アンナには脂肪燃烧系スポーツドリンクを頼まれた。この辺で、こいつらの性格の違いが出てるなあと感じてしまう。香苗は食いつぷりがいいから、合宿の料理番である俺としては非常に嬉しい。アンナは遠藤先生に可愛がられたためにダイエツトでもしているんだろが、あれ以上小柄になってしまえばもう中学3年生には見えなくなってしまうと俺は思う……。

ともあれ。本来はちゃんとした経路があるのだが、生徒会室からの近道を通って礼拝堂に行くことにした。生徒会室の窓を軽く飛び越え、そのままテニスコートの横の小道を通る。時々俺の真横のフェンスにボールが当たって驚くが、まずフェンスを破って俺の頭を直撃、なんてことはありえないので安心して歩ける。そのまままっすぐ行くと、とても街の中心部とは思えない緑地。「白鷺台」の名はこの街中における不自然な自然条件からきていると、どこかで聞いたことがある。

なるほど、香苗の言うとおりだった。礼拝堂には鍵も何もかっちやいない。盗まれそうなものなどないし、一般市民にも開放されていたりするから別段問題はないのだけれど。

重そうに見えて、ドアは女子生徒一人でも簡単に開け閉めができるつくりになっていた。そう、女子生徒一人でも……。「？」

誰もいない、と聞いていたのだが。ドアを開けると、女の子が一人、やや怪しげな挙動で周囲を見回しているではないか。この特徴的なジャケットとセーラー服が融合されたような制服は間違いなくうちの中学のもの。ただ、俺が違和感を覚えたのはもっと別なところだった。

うちの中学の制服は、学年によってリボンやネクタイの色が変わるのが最大の特徴だ。

男子生徒のネクタイは、1年生はエンジ色、2年生は紺色、俺たち3年生は深緑、と決まっている。実際俺が今つけているネクタイも深緑である。

一方女子生徒のリボンは相当こだわりがあるようで、1年生は水色、2年生は薄紫、3年生は薄いピンクになっている。聞いた話だと特注で作っているらしいが……今はそれは関係ない。

俺がそこで出会った女の子の制服は、間違いなくこの中学のもの。ただ、リボンの色が、水色なのだ。

昨日の出校日で、新しい学年の色のネクタイやリボンが配られた。

そのため、水色のリボンをつけた生徒はいないはずなのだ。萌美ちゃんだって、もう2年生カラーである薄紫のリボンをつけている。当然アンナや香苗はピンクのリボン。

とすると、この子は……新入生？ きつとそうに違いない。顔立ちにまだ小学生っぽさが残っている感じだ。

「もしかして、迷った？」

できるだけ優しく声をかけてやると、その女の子は、少し戸惑ったように、怯えたように頷いた。なんとなく、初めて出会った頃の萌美ちゃんに似ている。あの子もやたらと図体のでかい俺を怖がっていたつけ。

「俺も1年のときしょっちゅう迷ってたよ、この学校無駄に広いからさ」

「え、ということとは……」

「そ。俺、3年生だよ。新入生でしょ、君」

女の子と話すのはちよつと苦手な俺だが、なんだかスラスラと言葉が出てくる。なぜかのか？ わからない。多分、この子を怖がらせないようにとの必死の配慮なのかもしれない。

「はい、あの、新入生代表の挨拶の練習をするからって言われて……」

しかも、秀才。新入生代表の挨拶は、毎年特別進学クラスの主席入学者が勤めることになっている。この子が、今年の学内トップクラスの秀才。やべえ。俺なんて第1志望の高専危ないって言われてんの……。

「あー、なるほどな。どこに行くように言われたんだ？」

「講堂ですけど、どこだかわからなくて……」

なるほど、遠藤先生が何か初歩的なミスをやらかしたらしい。講堂を使うとの届出は生徒会でしていたはずなのだが。彼女にあの映像を見せたら色々な意味でネタバレになってしまっから困るというのに。

「講堂なあ……多分生徒会の連中が使ってると思う。俺もその関

係でこつち来たから」

「え？」

「あれ、わからなかった？ 俺、生徒会長なんだよ。名前は穂積雅弘。新入生歓迎の挨拶、練習しようと思ってさ」

そう言つて鞆から「新入生歓迎の挨拶」と書かれた紙包みを取り出すと、彼女の頬が突如火が点いたように真っ赤になる。なんだ、俺が何かしたつていうのか？

「あ、あの、えっと……すみません！」

まさに絶叫という言葉がふさわしいほどにでかい声で叫び、しかもものすごく深いお辞儀をして、その子はテニスコートの横を走り去つていった。突然のこと、追いかけることもできない。

「……やっべ。名前聞いてねえ」

コウにもよく言われるのだが、肝心なところでどこか抜けているようだ、俺は。ああ。あそこで名前聞いたときや、違う結果が出たかもしれないのに。

……違う結果？ どういうこつちや。

なんかもう、俺、よくわかんねえ。

というわけで、あの厳肅すぎる礼拝堂で練習するのも気が引けるので、試しに講堂に行つてみることにする。そろそろあのビデオ上映会も終わったことだろう。あいつらのことだから、相当馬鹿丸出しのできになつてるんだろうな。

例の抜け道を抜けて、生徒会室の窓にひよいと腰掛け、我ながら器用に外履きの革靴と、内履きのスニーカーを履き替える。そしてそのまま革靴を持ち、生徒会室に飛び込んだ。

「あれ、雅弘、あんたあたしの激辛チキンはー？」

「それどころじゃねえつつの」

ああもう、本当にそれどころじゃないんだって俺は。下足ロッカーに適当に革靴を放り込み、ひとつ息をつく。

しかしまあ……ものすごく広い校舎だ。うっかり始業5分前に玄

関に着いてしまったら遅刻することは間違いないだろう。玄関が広いのだ。というか、ちよつとしたガラス張りのホールのようになっていて、生徒たちが談笑できるようテーブルや椅子なんかまで設けられている。そして目を引くのは、ガラス張りの円形ホールに寄り添うように作られた二つの階段。右を向いているのが、俺たちが普段授業をしているいわゆる「普通教室棟」の2階へ向かう階段。3階へは2階の普通教室棟にあるごくごく普通の階段を上ることになる。俺も1年の頃は、この妙な構造の校舎に散々苦労させられたものだった。3年になると普通教室棟の1階に教室があるのでそんなに苦労はしないのだが、それでもやはりこの構造はいまだもって謎だらけである。

ちなみに左を向いている階段は、音楽室やら理科室、情報処理室、図書館、生徒会室などのある特別教室棟へ向かう階段。生徒会室は1階にある。でないと俺が窓から出入りするなんて真似は到底できない。

そして、玄関を入れて直進すると職員室やら生徒指導室やらが廊下の両脇に立ち並び、いわゆる「管理棟」。そこからまた渡り廊下が二つに別れ、右側に向かうと講堂、兼第1体育館がある。

俺の向かう先など決まっている。講堂兼第1体育館。

「ん、雅弘、どうした？」

向こうからがやがやと男子生徒数人の話し声が聞こえてきた。その中から遠藤先生の声も飛んでくる。

「いや、入学式の挨拶の練習を」

「そうか。だが残念ながら先約がいるぞ。新入生挨拶の子だな。名前はいと、なんだったっけな……浅田佳織」

物覚えの悪い俺の脳みそに、その名前が一瞬でインプットされた。

……ああ、こういうのを一目惚れって言うんだな。

Mission 4 入学式へのカウントダウン（語り部：春樹）

暇だ。今までの人生でこれだけ暇と思ったことはないかもしれない。というの大げさか。

新入生歓迎のデモムービーの作成はとづくに終わっているの、俺はナツツンと萌美ちゃんを手伝うために理科室を訪れる。教室を飾る造花が足りないので手伝って来い、とコウに言われたので今ここにいるわけだが……。

妙に静かだ。どちらか一言も言葉を発しない。俺たちはこの微妙な空気がくすぐったくて仕方がないのだ。お互いに好き合っているのは誰がどう見たってわかるのにどちらからも言い出そうとしない、なんとなく気まずい雰囲気。

「後どのくらい作ればいいんだ？」

「聞くと返事をしたのは萌美ちゃん。」

「あと200個もあれば間に合いますよ。ハル先輩、コウ先輩に言われてきてくださっただけですよね。」

萌美ちゃんはそう言うがささずナツツンと彼女の間に椅子を置いてくれる。ちょっとこれは気まずい。萌美ちゃんもそこまでナツツンを避けなくてもいいのに。

だがそれを言ってしまうえば大変なことになるので黙ってそこで作業させていただくことにする。お花紙を数枚重ねて折り、真ん中をホチキスで留め、紙を開いていくと花ができる。しかし単純作業には飽きが付きまとうもので、俺もナツツンも、萌美ちゃんすらも面倒そうに花作りにいそしんでいた。

「なんつーか、変化ほしくねえ？」

「オレもそう思ってたんですけど。」

「私もちょっと退屈です。」

「つーか、あといくつなんて数えてらんねえよな。」

それもそうだ。4クラスある教室や、廊下にまで飾りつけが要る。

花がいくつあっても足りないし、数えたところで意味もないだろう。

「まあ適当にやろうぜ。足りなかったら作ればいいし余れば来年使えばいいし」

「先輩適當つすね。いいんですか？」

「いいっていいって」

黄色い紙で作った花をひとつ、段ボール箱に放り投げる。この根気の要る作業を二人で黙々とずっとこなしてたんだよな、こいつらすげえや。

「お前ら生徒会の柱になれるんじゃないかねえの？」

素直にそう言ってやると、

「先輩、それどっかで聞いたセリフっすね」

予想通り、ナツツンからツツコミが飛んできた。やっぱり元ネタはばれていたか。

翌日。今度はアンナと香苗の手伝いである。

出来上がった生徒会便りを新入生の一人一人の机に置いていくという作業だ。さすがはアンナ、いまどきの少年少女（って俺も少年の部類に入るか）が好みそうなイラストで制服の紹介をしたり、部活動の紹介もきめ細やかな気遣いが利いている。これを全て手書きで書いたというから驚きだ。

ただ、納得いかねえのが、そこに遠藤の影があるってことだ。

遠藤のことは人間として嫌いじゃないが、気に入らないのはアンナがあいつをとことん慕っていることだ。それも、尋常じゃなく。

相手は子持ちだと説得しても聞く耳を持ってくれないアンナに、中途半端な優しさを投げかける遠藤。納得いかん。だからかどうかは知らないが、ついアンナに八つ当たりしてしまうのだ。八つ当たりというより、からかうといったほうが正しいか。

そうでもしないとなんとなくアンナとは接点が持てない。2年間ミス白鷺台中の座をほしいままにし、今年も噂ではほぼ当確らしい。そんな子にどうやって話しかければいいのかわからないのだ。

で、アンナは泣きべそかきながら遠藤のところへ飛んでいく、つていうオチ。もういい加減飽きてきた。自業自得だが。

「なあアンナ」

「？」

ハルちゃん（小学5年、アンナが転校して来た頃からそう呼ばれている）とは話したくもない、とでも言いたそうな恨みがましい面構え。これもいつものこと。俺が招いた結果だ。

「お前つて、絵うまいのな」

ぼかんと口を開けて俺のほうを見る。次の瞬間マンガチックにはさばさつと生徒会便りを床に落とす、俺に向かってこう言う始末。

「どうしたの？ハルちゃんらしくないよ」

俺はがっくりと首を落とす。そこまで思われていたとは。小学生の頃はそんなこと気にもしなかったのに、中学に入ってからこんな風におかしくなってしまったのだ。

「それ、100パーお前が悪い」

青雲量の一室。アンナとこのことをコウに相談したところその話がナツツンやマー坊にまで伝わり（同室だから当然だ）男部屋はその言葉で満たされていた。居心地が悪いことこの上ない。だが自分がまいた種は自分で刈らなければ、である。

「お前もさ、いい加減認めたらどうなのよ。好きなんだろ、アンナのこと」

マー坊が痛いところを突いてくれる。……え。痛いところ、つて言ったよな、今、俺。

「オレもわかりますよ。好きな子には意地悪したくなるの。でもオレは萌美ちゃんが泣くのが嫌だからしないんです」

「ハルも意外に天邪鬼なところがあるからな」

「ここまでボコボコに言われたのはおそらく14年間の人生で初めてである。」

「……あーわかりました、俺はアンナのが好きですよ、しかも今やっと気づきましたよ」

「半ばヤケクソだ。認めてやろうじゃないの。自分と向き合ってやろうじゃないの。」

「そうそう、それでいい」

他の連中が頷いたあと、こう問いかけてみた。

「でも俺さ、今まで人好きになったことねえからどう接したらいいのかわかんねえんだよな」

「少なくともいじめたりはしないとと思うぞ」

ハイ。そのとおりです。

結局その夜は俺の恋愛相談に終始することになった。もともと、「今のお前には無理だ」とボコボコにされるだけで終わってしまったが。

今の俺には無理だつてなら変わってやろうじゃないか。その前にアンナに気持ち悪がられそうだが。

「ハルちゃんらしくないよ」
つて。

MISSION5 入学式、そして……（語り部：雅弘）

その日はいつもより早く登校して、全メンバーが生徒会室に集結していた。遅刻常習犯のハルも今日は早く登校してきている。

「じゃあ今日の最終確認するから。まず香苗は介添え、それからマ坊、練習はしてきたよな？」

コウの質問に俺は親指を立てて合図をする。

「OK。任せとけ」

「それからアンナは……」

結局、生徒会役員は模範的な制服姿に身だしなみを整え、生徒会役員の席に向かう。ただし萌美ちゃんは吹奏楽部なので別行動になる。

吹奏楽部の行進曲の演奏で、新生が入場してきた。しかし俺は内心では気が気でなかった。浅田佳織。その名前が妙に頭から離れないのだ。マトモに対面するのは今日が初めてだ。まして俺は生徒会長。ここはカッコよく決めたいものである。

「生徒会長挨拶、生徒会長、穂積雅弘」

名前を呼ばれ、国旗や先生、来賓に一礼し舞台に立つ。何度もこうして舞台に立ってきたが、今日ほど緊張したことはなかった。

「新生の皆さん、入学おめでとうございます。……」

そこから先の記憶はない。最後に「生徒会長、穂積雅弘」と名乗ったことしか覚えていない。壇上に入ったときと逆の動作をして、俺は生徒会事務局の席に着く。

と、遠藤先生が親指を立ててみせる。「完璧だったぞ」とでも言うように。

次は新生の挨拶。浅田佳織が返事をし、壇上にのぼる。初めて会ったときは違う風格が漂っていた。チャペルで会ったときのはかなげな雰囲気はかけらもない。さすが主席入学者、である。

「新生代表、浅田佳織」

しっかりと挨拶を締めくくり、壇上から降りる。最後の最後まで一部の隙も見せていない。完璧だった。俺も見習わなければいけないかもしれない。

「な、マー坊どうしたんだ？」

放課後に生徒会室に寄ると、まず春樹がそう口火を切る。

「どうしたんだ、って、何が？」

「今日ちよつと変だよ、雅弘。ははーんさては恋の悩みだな？」

香苗が俺の目の前で人差し指を振りながらじろりと俺を眺めてやる。
がる。

「なんだそりゃ」

言うなり俺はいつもの場所……歴代の生徒会長が座っている席に向かう。

……でも香苗の言うこともあながち嘘じゃないんだけどな。

「あの、新入生の子……浅田、佳織ちゃんだっけ？可愛かったね」
アンナまでもがそんなことを言う。お前が可愛いと言うってことはよっぽどだぞ、2年間ミス白鷺台中の名をほしいままにしてきた女よ。

「そうそう。なんか雅弘、あの子を見る目つきがいやらしかったよ

ー

「いやらしいはねえだろ」

膨れてやる。俺がやっても可愛くもなんともないのだが、頼むから佳織ちゃんの話は出さないでほしかった。

「ったくよー、いくら俺が女つけないからって……」

「あの……失礼します」

絶句。

生徒会室のドアをわずかに開けて立っていたのは、当の佳織ちゃんじゃないか。やべえ。俺今すげーかつこ悪いとこ見せてなかったか？

「あ、新入生挨拶の子だよ。どうしたの？」

こういうのはアンナの仕事だ。彼女は人当たりがいいから、（あ
る意味）入りづらそうな生徒会室の雰囲気をやわらげてくれる。も
っとも、この生徒会メンバーは曲者というか変人揃いだから怖がら
れる必要なんて全くないのだが。

「あの、生徒会長さんの生徒手帳が落ちてたので……」

初めて会ったときと同じような、小動物が怯えてるような目。い
や、そんなに怖がらんでもいいだろうに、いくら俺が図体でかいと
しても。

「ああ、マー君ね。あそこの大きい人。あたしが渡しておいたほう
がいいかな？」

「……はい、お願いします」

え、それで終わり？俺は無意識で席を飛び出してダッシュでドア
に向かう。

「あれ、マー君」

「助かった、ありがとう」

「あ、どういたしまして……」

きょとんとするアンナと佳織ちゃん、その他大勢。やべえ。俺は
何てことをやらかしてしまったんだ。この沈黙が妙に恐ろしい。

「えっと、それじゃあ失礼します」

「はい、よかったらまた遊びに来てね。ここは先輩後輩関係ない
よー」

おいアンナ、一言余計だぞ。そう思って俺の指定席に戻ろうとし
た瞬間のことだった。

「……やっぱり、そうだったんですね」

萌美ちゃんがポツリとそう言ったもんだから、生徒会室は大爆笑
の渦に包まれた。普段物静かなだけに、彼女のこのパンチはあまり
に強烈だった。

「で、いつの間にか会ったの？今日？」

「いや、その……」

俺はこの手の話には慣れていない、というか今まで女つけも何も

なかったのだ。素直に吐き出すしかなかった。しかも事務局メンバー全員＋遠藤先生＋手塚先生の前で。情けない。情けなさすぎて泣けてくる。

「そうか、雅弘にも春が来たんだな」

遠藤先生までそう言う始末。

皆が俺と佳織ちゃんのことをあーだこーだ言っているのを尻目に、窓の外を眺める。桜が咲いていた。そう、春なんだ。この学校で過ごす最後の春。

悔いなく過ごしたい。このメンバーで。できればその中に佳織ちゃん姿があってほしい。そう強く思った。

MISSION 6 生徒会は小休憩（語り部：萌美）

もうすぐ、私たちが「中体連」と呼んでいる地区をあげての体育大会が始まります。

運動部員が多い生徒会事務局員はそれぞれの部活の練習でいっぱいいっぱい。特に生徒会の行事もないので部活に専念しているんです。

私萌美は吹奏楽部なので、入場行進の合同演奏に回ります。もつとも、楽器を1時間近く吹きっぱなしなので、私の体力がどれだけ持つか心配ですが……。あ、ちなみに楽器はクラリネットです。

そこで、今回は生徒会役員のうち運動部の皆さんの活躍ぶりを私と一緒に見ていきましょう。

まずは野球部から。実は遠藤先生は野球部の顧問でもあるんです。ジャージ姿でノックをしている先生、いつもとはまた違ったカッコよさがあります。白鷺台中学校でも人気が一番高い先生ですしね。アンナ先輩が追っかけ入部してマネージャーになったのもわかります。

アンナ先輩は部活動簿に何か記入したり、玉拾いや遠藤先生のサポート、洗濯までなんでも器用にこなします。時々遠藤先生と話をしているのを見てなんともいえませんが……。きつと器用さがんばりを褒められたんでしょうね。

続いて隣のグラウンドで練習をしている陸上部。こっちはコウ先輩とハル先輩という「白鷺台中のゴールデンコンビ」がいるので、毎日ギャラリーが絶えません。もつとも、私はいつもあの掛け合いを見ているのでなんともいえませんが……。

コウ先輩は長距離メインだと聞いています。噂では有名な学校か

らスカウトが来ているとかいないとか。聞いてみたら、3000メートル走に出るようです。3キロ。陸上界では当たり前のことですが、私からすると驚きの長さです。黙々とグラウンドをぐるぐる走っている人を見かけたらコウ先輩で間違いないと思います。

逆にハル先輩は障害走が得意なようです。110メートルハードルに出場すると聞きました。こっちもひたすら抜き足の練習をしているそうなので、見ればすぐにわかります。

今度は場所を移して第1体育館です。ここでは男女バレー部の練習が行われています。最近は特に実戦形式の練習に特化しているみたいです。

香苗先輩は白鷺台中バレー部の壁。背が高いのでブロックならお手の物です。アタックも強力な香苗先輩は今年も強力なAチームで出場するそうです。

一方の雅弘先輩は今日も強力なアタックをばしばし打っています。白鷺台男子のエースアタッカーである雅弘先輩もAチームの主将として出場します。

こうしてみると先輩は皆文武両道を見事に成し遂げていますね。私も見習えるようにがんばらなきゃ。

あ、ちなみに夏岡君は文芸部なので、全校応援でもない限りは自宅待機だそうです。もっとも野球部もそれなりに強いので、全校応援に駆り出される事必至ですが……。

「白鷺祭」 一般的には文化祭と呼ばれる行事が近づいてきた。総体のときはまだ準備も楽なものだったが、今度は県大会が近づいているから気が気でない。

「じゃあ今年の文化祭のテーマは『絢爛』で」

全校生徒によるアンケートの結果、そう決定した。

僕が言った瞬間アンナがノートパソコンを操作して生徒会便りをリアルタイムで作成している。本当に器用だ。

野球部も県大会出場が決まって忙しいから家で作業ができない、と言ってこういう作業をしている。生徒会役員の会議が終わったら野球部の練習にダッシュで移動。そんな毎日が続いている。いつも一生懸命なアンナだが疲れないんだろうか。僕でさえ疲れてるつのに。

かく言う僕も、このあとダッシュで陸上部の練習に向かわなければならぬ。それはハルやマー坊、香苗も一緒である。

……そう。結局バレー部も女子は優勝、男子は準優勝で県大会進出が決まったのだ。文武両道を校訓に掲げるうちの学校だ、当然のことかもしれないがここまで徹底しているのも珍しいだろう。生徒会役員で白鷺祭の作業に専念できる人間が皆無なのだ。

文化部の2年生コンビなどは自分の部活でいっぱいといっぱいといった状況。かたやナツンは冒険ファンタジー小説をいかに完結させるかで頭を悩ませているし、萌美ちゃんも萌美ちゃん練習が長時間になり、毎日鉄分のサプリメントが欠かせない状況。

去年予測はしていた事態だが、これは生徒会の危機的状況だ。遠藤先生も手塚先生も困り果てている状況。どうにかならないものか。しかし泣き言を言ってもどうにもならない。それぞれがそれぞれで頑張るまでだ。

「萌美ちゃん、エンディングで吹奏楽は何演奏するの？それによつて演出考えるから」

「あの曲です、……」

「前日のパレードは仮装行列なんてどうだ？」

短い時間しかとれない生徒会の会議の中で意見を集約するのは大変だ。生徒会便りの臨時増刊をリアルタイム作成するアンナの横では、ナツツンが必死こいて議事録を作成している。議事録の下には書きかけの小説の原稿用紙があった。しかし僕はそれを咎める事はない。僕らが県大会に向けて練習している以上にナツツンは追い詰められているのだ。県大会より白鷺祭のほうが先にあるのだから。「じゃあ今日の会議は終わり。各自部活動に専念するように」

僕の一声で会議は解散となった。ほぼ同時にみんな立ち上がり、ダッシュでそれぞれの持ち場……もとい部活へと向かう。生徒会の会議の時間が30分しか取れないのにただいたずらに時間ばかりが過ぎていくのがもどかしかった。

「それは俺だつて同じだよ」

そう答えるのは遠藤先生だ。2時間目と3時間目の間に「中休み」と呼ばれる20分間の休息が僕らには与えられているんだが、それがちょうど遠藤先生の担当する社会科のあとにあったのだ。マトモに遠藤先生と会話できるのがその時間しかないので、それを生かして相談を持ちかけてみたのだ。今の状況で何もできない自分が悔しい、どうしたらいいのだろう、と。

「俺だつて今の状況で何ができるか考えてるさ」

「是非先生の知恵を借りたいです」

言つと、先生は少し顎に親指を当てて何か考えるような仕草を取る。しかしすぐに、

「佐枝は一人で抱え込みすぎなんだ。何もお前一人の生徒会じゃないだろ。頼れる仲間がいるんだからまずはそつちを頼ることだな」
なんて言つた。

「僕、抱え込みすぎてますか？」

「俺から見ればそう思えるけどな。別に議長だからってそんなに気を張る必要はないじゃないか。他のメンバーにも同じこと言ってるぞ、俺は」

「はあ……」

先生の後姿を目にしながら、僕はぼんやりと廊下に立ち尽くす。今はもうとっくに夏服のシーズンで、先生の白い半袖のシャツが眩しかった。

「なあマー坊」

最近生徒会室で昼食を食べながら作業を進めている。それでもしないと間に合わないのだ。

「あ？」

ずいぶんと間の抜けた返事だが、弁当食つてるときぐらい気を抜かないとやっていけないだろう、生徒会長は。

「最近どうよ」

「どつって……忙しくて目が回りそうだよ。生徒会もバレーもやらなきゃいけないし、家の手伝いもあるし……」

「そうだよなあ……」

言いながら、僕は弁当に入っていた唐揚げを口に放り込んだ。これは冷凍ものだな、母さん。

それにしてもマー坊もすごいものだ。毎日遅くまで部活に汗を流し（それは僕も一緒だが）、そのあと更に実家の居酒屋の手伝いまでしているのだ。萌美ちゃんなら間違いなくぶっ倒れていることだろう。僕ですらそういう生活を送れるかどうかは怪しいところだ。

食べ終わったところで作業の手伝いだ。いつも白鷺祭前日には市内をパレードして白鷺祭の開催を伝えるのだが、そのときに先頭を行く僕ら生徒会が持つ横断幕を作っているのだ。

今年のテーマは絢爛ということで、アンナがそれっぽいデザイン

を持ってきてくれた。さすがアンナとも言うべきデザインだ。完璧。それを拡大したものにポスターカラーで色をつけていく。一見地味な作業にも思えるが、これこそが生徒会役員の本業なのだ。

真つ赤なポスターカラーで「絢」の字を塗っていく。しかもこれ、グラデーションもつけなければいけないから大変だ。アンナのデザインは完璧だが、完璧すぎて難しくなるという結果を招いてしまった。また遠藤先生に頼まれたから張り切ってやっていたに違いない。もともと、アンナのこの案に全員一致で賛成を出したのは僕たち生徒会役員なわけだが。

少しずつではあるけれど、僕らはちゃんと一步一步進んでいくんじゃないか、地味ではあるけど着実に。

ふとそんな考えが頭をよぎった。しかし今は目の前の仕事に集中するべきときだ。いかにしてうまくことグラデーションをつけられるか僕が頭を悩ませることになる。

MISSION8 極秘会議（語り部：春樹）

白鷺祭もいよいよ2日前になり、俺たちは明日のパレードのために入念な打ち合わせをしていた。吹奏楽部と各クラスの代表、生徒会役員での会議は思いのほかあっさりと言進んでいく。

「じゃあ、明日はよろしくお願いします」

コウの一声で会議は解散となる。あとは俺たちも自分のクラスや部活の準備に追われることになる。クラスの出し物はギリギリまで作成が続くので、今が正念場とも言つべきときなのだ。

俺のクラスではバルーンアートと折り紙アートの展示が行われる。細長い風船で器用にウサギの顔を作ってみせるアンナを見ていると、なんだか心かもやもやした。

「……あれも、遠藤のためなんだろ」

そう。俺とアンナは同じクラスで、しかも担任は遠藤だ。もう皆知っているかもしれないが、アンナは遠藤のことがそれはそれは大好きなのだ。しかし遠藤には奥さんも子供もいるわけで……。

一方の俺は、小学生の頃はまだ素直だったのだが、今では思春期とかいう時期に入ったせいか、素直になることができない。アンナにちよっかいを出しては悲しい顔をされ、更に遠藤に近づく始末だ。これじゃ話にならない。

「春樹、何ぼーつとしてんだ」

当の遠藤が、ニヤニヤしながら俺を小突く。白鷺祭に向けての職員会議が終わったらしい。

「いいかー、今日は8時になったら全員帰るようにな」

そう言つと、もう一度俺のほうを向きなおし、

「何なら話でも聞けど」

と続ける。

「おーい保坂、ちょっとここ手伝ってほしいんだけどよー」

向こうからそう呼ぶ声が聞こえたので、俺は逃げるようにその場を離れた。なんだか先生にだけは俺の心中を悟られたくない。

「そろそろ解散だぞー」

午後8時。遠藤が教室のドアを開けて、そう言いながら入ってくる。

「お、皆いいできじゃないか」

あいつが手に取ったのは、先ほどアンナが作っていたウサギのバールンアートだった。遠藤も期待させるようなことをするからアンナが図に乗るんだっての。

「誰が作ったんだ、これ？」

「藤原さんです。でも、今日は用事があるからって7時ごろに帰っちゃいましたよ」

え、いつの間に。確かにあたりを見回してもアンナはどこにもいなかった。きつと今の先生の言葉を聞いたら、アンナは尻尾を振って喜ぶに違いない。

「ふーん……」

そのあと先生は俺のほうに向かってきて、

「そうだ春樹、ちょっと話したいことがあるんだが、いいか？」

などとのたまうわけだ。

「え、俺何もしてないですよ」

「何もしてないからこそなんだよ」

先生はなぜかニヤニヤしている。ということは、別に俺を叱る気はないらしい。

うちのクラス全員が帰ったあと、生徒会室に向かい、いつもの席に座る。だが遠藤は俺の隣、いつもはアンナが座っている席にいる。

「お前、杏奈のこと好きだろう」

開口一番の言葉に、俺はあっけにとられることになる。突然何を言い出すんだ、この教師は。

「え、なんでいきなり……」

「ははは、生徒のことはなんだってお見通しさ。特に生徒会の事務
局長は、な」

「はあ……」

豪快に笑ってみせる遠藤だが、俺の心中はまったく穏やかではない。
い。なんで遠藤はそんなことを知っているんだ。

「好きな子をいじめたい気持ち、俺もわからないことはないぞ。た
だ、そんなこととしてその子を傷つけるなんて、これほどむなしこ
とはないんじゃないか？」

「わかつてはいるんですよ、俺だって。ただ……」

「ただ？」

そこから先は言えなかったが、遠藤なりになにかを察したらしい。
さすが「生徒のことなら何でもお見通しだ」と言うだけある。

「とつくに知ってるよ、杏奈が俺のことを好きだってぐらい」

大人の男の余裕ってこういうことを言うのか、と思った。俺なん
かとは違ってあっさりと言ってるのける。

「誰から見てもバレバレですよ、あはは」

「そうなんだよな……」

俺の記憶では遠藤がこんな表情をしたのは初めてだ、と思う。た
とえクラスや生徒会で問題が起こっても難なく対応していて、「大
丈夫だ、俺についてこい」とでもいうようなでっかい人間だったか
ら。その遠藤が、困り果てている。

「立場上あいつの気持ちに伝えてやれないのが悲しいよ。俺よりも
つと杏奈にふさわしいやつはいるんだけどな。だから……」

遠藤は一度言葉を切ると俺のほうに向き直り、

「杏奈のこと、頼んだぞ」

「は？頼んだって……先生、まさか」

「ん？なんだ？」

「まさか、転勤とか退職とか……」

不意に心にやってきた嫌な予感。そのひどく悲しそうな口ぶりが

らすると……。

しかし遠藤はいつもの笑いでその不安を払拭して見せようとした。

「ははは、そんなわけないだろう」

俺には納得できなかったが。なんといえはいんだろう、俺の勘が何かを訴えかけてきているのだ。そんなはずはない、でもこいつの今までにないような表情を見たらそれが本当のような気がしてくる。

きつと遠藤は、俺たちの卒業と同時にこの学校を離れようとしている。

「……で、頼んだ、ってなんですか？」

「そうだな、簡単そうに見えてすごく難しいんだけどな。お前が素直になることだ」

「俺が？」

そんなことで一体何の解決になるのか。

「俺はな。お前の恋愛、応援してるんだ」

「はあ」

「ただ、お前は自分のまいた種のせいでアンナを苦しめているわけだ」

確かに、そうかもしれない。素直になれずにその結果としてアンナを傷つけていることは俺自身もわかっていた。微妙な年頃とか言うやつでなかなかうまくいことそれを克服することができないのだが。「一回刈り取って、もう一度、質のいい種まこうとは思わないか？質のいい種。か。」

「でも、どうやって……」

「だからなー」

じれったそうに遠藤は苦笑し、

「素直になれつての。お前はいつも部活にも生徒会にも全力で直球で取り組んでるじゃないか。成績は……まあこの際は言わないでお

「こうか」

「あんまりシャレになってないんですけど……」

「それで、だ。恋愛にももっと直球で取り組んでもいいんじゃないか、と思うわけだ。俺は恋愛は学業の妨げになるとは思ってないぞ、逆に身が入る事だってありえるんだからな」

「はあ」

かくして、今度の白鷺祭で俺がアンナに告白する、という手はずが整ったわけだ。遠藤熙プレゼンツ・生徒会内輪での特別ミッションは果たしてどうなることやら。俺が心を決めないとどうにもならないことはわかってはいるのだが……。

白鷺祭直前。恋する女子だけじゃなく男子も悩んでいるのだ。

「だから、やめておいたほうがいいと思うよ」
「でも……」

もうここ3年で何度こんな会話をしたかわからない。

あたしは今、アンナと二人で生徒会室にいる。例年だと集合時間1時間前には他のメンツもいるんだけど、今日は10周年ということもあるのか、皆クラスや文化部の準備でいっぱいっぱいなのかもしれない。まだ誰も来ていなかった。

「ねえ、香苗、ちょっと相談したいことがあるんだけど……」

さっきクラスの準備をしているときに、アンナに声をかけられた。「ごめん、ちょっと生徒会のほう行ってくるねー」

クラスメイトにそう声をかける。同じクラスの雅弘は吹奏楽部との最終打ち合わせに行っているはずだから、誰も怪しむ人はいなかったと思う。

で、相談の内容はというと、やっぱりと言うか何というか、遠藤先生のことだった、というわけ。毎年この時期になると告白するべきかどうかアンナはすごく悩むのだ。

あたしも雅弘に告白するかどうか毎年悩んでいるんだけど、もう今年は失恋確定だし(あの1年の子に雅弘が一目惚れしちゃったからでもあの子は真面目でいい子だと思うし、あたしより雅弘にお似合いだと思うし……)悩む必要はなかった。もっとも、あきらめきれないのが悩みでもあるんだけど……。

「一応先生はもう子供だっているわけだしさ」

「でも言わないとあきらめきれないよ……」

「傷つくことになるかもしれないよ?」

「それは、やだな……」

恋する乙女は難しいのだ。

結局そうこうしているうちに当の遠藤先生と手塚先生が来てしまったから、話は終わったわけなんだけど、
「ずいぶん早いじゃないか。何の話してたんだ？」
なんて聞いてきたもんだから、あたしもアンナも腰を抜かしてしまっことになる。

ほどなくして、吹奏楽部の演奏や各クラス代表の仮装行列、生徒会役員といったメンバーでのパレードが始まった。あたしたち生徒会役員を先頭に、吹奏楽部、仮装行列といった感じ。生徒会役員は学校の代表ということで制服で歩くことになっている。

休憩時間に、アンナとさっきの話の続きをする。遠藤先生の目を避けるのは結構大変だったけど。

「とにかく、遠藤先生に気持ち伝えるのはおすすめしないな」

「そうかなあ……」

「うん。遠藤先生も多分困るんじゃないかな。あたしも……あきらめたし」

「雅弘君のこと？」

実はアンナがそうしたように、あたしも雅弘のことを話していたりする。入学式のあとにいつもものように一緒に帰ったんだけど、そこで1年の子の話をしたのだ。

「本当はあきらめきれないんだけどね、雅弘が幸せならそれでいいやーみたいなの、ね」

「そっか……香苗も雅弘君のこと大好きだもんね」

「伊達に小学生の頃から惚れてないわよ。あいつのこと追っかけてバレー部に入ったんだし」

「でも、あたしはすぐにはあきらめられないなあ」

「時間が解決してくれるって」

あたしの気持ちも、そうだと信じていたい。クラス代表で魔法使いの格好をした（彼女のクラスではお化け屋敷をやるのだ）浅田さんを見やりながら思う。

浅田さん、あたしが見てる限りではすごく変わったと思う。入学してすぐはあんなにはかなげだったのに、今ではクラス代表で仮装行列に参加するほどになったんだから。

「そろそろ時間だぞー」

遠藤先生の声が聞こえた。パレードの復路が始まるようだ。腕時計を見ると午後5時半。学校について準備をしたりすると8時は回ってしまいそうだ。

帰ってきたあとには生徒会の展示の最終準備が待っている。白鷺台中学校の10年間を振り返る、といったテーマで、卒業アルバムや昔の制服（5年前に今の型にモデルチェンジしたらしい。昔はシンプルなセーラー服に学ランだった）を展示することになっている。

会議机の上に卒業アルバムを置き、去年の写真を掲示板に貼る。

「ねえ香苗、このセーラー服のスカーフってどうやって結ぶの？」

「はいはい」

制服をトルソーに着せながらアンナが聞いてくる。後ろでは春樹たちが卒業アルバムを見ながらわいわい騒いでいる。仕事しようよ、仕事。

「で、アンナ。気持ちは決まったの？」

「うーん、まだ」

「そっか……」

小学生の頃の制服の要領でスカーフを結ぶ。昔の普通のセーラー服も悪くはないなと思う。もっとも、スカーフの色が水色ってあたり、うちの中学校だなあって感じはするけど。

「時間が解決って、どのくらいかなあ」

「高校3年になる頃には忘れてるって。アンナにはもっといい人いるよ」

あたしもそうであってほしいけれど。

「どうだ？」

「進んでるじゃないか」

ひよっこり遠藤先生と手塚先生が顔を出す。手塚先生は放送部の顧問も兼任しているから生徒会にはなかなか顔を出さないんだけど、今日は放送部の準備も終わったらしい。

「7時半には終わりますよ。意外に早く進んでます」

雅弘が生徒会長らしく答える。こういう時はかりはしっかりして
るじゃないの。さっきまで春樹たちとワーワー言ってたくせに。

「そうか、下校時間は9時だからクラスにも顔出せるじゃないか」
言つと、あたしたちのほうへ二人して近づいてきて、

「遠藤先生、懐かしいですね、この制服」

「ええ、僕たちが赴任してきてすぐに変わってしまいましたけどね」
などと話すものだから、アンナが一気に顔を真っ赤にする。

「永井たちはこの制服を見たことがあるか？」

「はい、小学校の低学年の頃ですけど……」

「あたしは見たことないなあ。香苗いいな」

アンナが本当にうらやましそうに言う。そうだ、あたしは小学校
が違っただけど、アンナがこの町に来たのは小学5年の頃だと聞い
ている。

「アンナは5年生の頃にこっちに来たから新しい制服しか知らない
んだよね」

「うん」

アンナが傷つくのは絶対に避けたい。でも、アンナの気持ちもわ
からなくもない。複雑な気分だった。

Mission100 白鷺祭、去来する思い（語り部：杏奈）

今日は白鷺台中学校の開校記念日でもあり、白鷺祭初日でもある日。

本来なら5月に体育祭をやってから10月に文化祭なんだけど、今年は創立100周年っていうオプシオンみたいなものがついているから少し変わるんだ。

今年に限っては、体育祭を10月にして、7月に文化祭。夏服で行う文化祭は少し不思議な感じがする。今までそんなことはなかったから。小学校の文化祭も10月だったっけ。

あたしはひたすら生徒会とクラスの往復。といっても生徒会はほとんど放置プレイでいいので、7割はクラスの展示、3割は生徒会といった感じ。

「アンナ、そろそろだよ」

香苗の声が3割の時間を告げた。生徒会の当番（といってもただ受付のところ座っているだけ）は香苗と一緒にやることになっているんだ。

「お疲れさーん！」

生徒会役員の指定席にいる二人に香苗が声をかけた。あたしたちの前の当番はコウくん和ハルちゃんだ。

「あ、交代か」

コウくんが席を立つとハルちゃんもあたしたちのほうに目をやる。……でも、今日はなんだかハルちゃんの様子がおかしかった。あたしと目を合わせてくれないんだ。いつもならなんとなくわたしのほうに視線を向けているのがわかるんだけど……（あたしの思い違いじゃなれば）。

「え、あ、もう時間？」

焦ってハルちゃんも立ち上がる。でも、机か椅子に足を引っ掛け

たのか派手に転んでしまった。

「イテテ……」

「なーにやっつてんのハルったら」

「やっちまったー」

腕を組んでいかにも楽しそうに笑う香苗に、恥ずかしそうに頬をかくハルちゃん。でも、いくらハルちゃんだからといって、ここまですービス精神旺盛だったっけ？

「じゃあ後は頼むよ」

一通り引継ぎが終わって（といつてもたいしたこととはしてない）一度はコウくんと一緒にクラスに戻ろうとしたハルちゃんだけど、

「ああそうだ、アンナ」
そんなことを言いながら戻ってくる。何、今度はなにが言いたいの？

「ハルちゃん、どしたの？」

またいつものようにいじめられるんだろうか……。果たしてそのいやな予感当たってしまったことになる。

「さつき遠藤先生の奥さんと子供が来てたぞ」

「っ……！！」

あたしにとつては耳をふさぎなくなる言葉だ。遠藤先生の奥さんと子供……。そう、遠藤先生には大事な人がいるからあたしなんかかないっこないって知ってる。

でもあたしは遠藤先生が好きで、好きで……。涙がこぼれそうになった。

「ちよつと、ハル」

たしなめるように言う香苗と、今にも涙をこぼしそうなあたし。

「俺、あんな奴に負けねえからな」

でも、次の言葉でこぼれそうだった涙は一気に引っ込んでしまうことになる。

「へ？」

香苗と二人同時に変な声を出してしまった。今、ハルちゃん、何て？

「げ」

ハルちゃんはとたんに顔を真っ赤にして怒り出し、

「とにかく、あいつなんかやめとけ、やめとけ！」

なんて言いながら教室のほうに走り去っていく。あたしも香苗も、ぼかんとしてそれを見送るだけだった。

「……なんだったのかな」

「ははーん」

首を傾げるあたしを香苗がニヤニヤしながら小突く。いつもの口癖を添えて。

「ハルつてば、素晴らしいぐらいのツンデレじゃない」

そこであたしの知らない日本語が出てきたので、あたしは思わず首を傾げてしまう。

「つんでれ？」

「あ、いや、なんでもないのよ。あいつつたらもつと早く素直になつてればよかったのにねー」

つんでれって言葉の意味はよくわかんないけど。つまり、あの。もしかして、ハルちゃんはあたしのことを？

「素直に、つて……それにさっきのハルちゃんの、あいつになんか負けない、つて言葉……それって、もしかして」

「そつに違いないって」

そこまで話したところで、あたしたち2人はやっと椅子に腰を下

ろす。

「なーんでアンナにはっかりちよっかい出すのかって思ってたら」

「でも、嫌いだから意地悪するんじゃないの？」

「好きだからこそいじめたくなるってこともあるんだって。男ってよくわかんないよね」

「そうだねー……よくわかんないや」

男の人ってよくわかんない。あたしも香苗と同感だった。

MISSION 11 絶対に折れない死亡フラグ（語り部：春樹）

しかし、それにしても暇である。別にどっかの変態が制服を盗んでいくというようなこともないし、写真を引っぺがして持つていくやつもいるまい。

なにせあのアンナですら遠藤の写真を持って帰ろうとはしないのだ。もつとも、おそらく展示終了後に、生徒会役員の特権で焼き増しを希望するだろうとは思うのだが……。

だもんで、俺とコウはどうでもいいような話をしてだらだらと生徒会の受付の時間を過ごしていた。遠藤の奥さんがとんでもない美人だったことや、クラスの展示の苦労話、そういえば進路はどうするんだ、という話にもなった。

そういう流れで、親友であるコウにだけは言っておこうと思っただけのことがあった。

「俺さ、文化祭が終わるまでにアンナに告白しようと思うんだ」

流れにそぐわない、絶対に折れない死亡フラグと言ってもいい唐突な俺の言葉に、ハルは盛大に立ち上がった。近くを歩いていた生徒が何人かこちらを見やるほどの勢いで。

「は、ハル、それ、なんだよ……」

「あ？お前知らなかったっけ」

至極あっさりとした、冷静に答える。もはや俺は昨日のアレで腹をくくるしかなくなっただけだから。

「いや、このタイミングでそれを言うか、って」

「ああ、言っさ、振られる気満々だぜ」

振られる気満々といいながら胸張ってみせる。そうさ、絶対振られる。そんなこと分かりきってる。でも、やるしかないんだ。

「でもなあ、春樹。敵は『あの』遠藤先生だぞ？」

「『その』遠藤に頼まれたんだ」

「はあ」

「いまいち納得いってない様子のコウに、俺と遠藤の間に何が起ったか説明してみせた。白鷺祭直前の遠藤との会話。」

「遠藤も困ってるらしいんだと。立場上アンナの気持ちにも応えられないし、でもアンナを傷つけたくはない、って」

「ふむふむ、と頷くコウ。」

「で、案の定俺の気持ちバレたってわけ」

「先生空気読みすぎだからな」

「要は間接的にあきらめさせようとしてるんだろ、俺があいつのことを好きだって気持ちを使って」

「冷静に考えると、実に酷い話だ。要するに俺の気持ちを利用してアンナに遠藤を諦めさせようということなのだから。遠藤がそんなに冷たい男だとは、少なくとも俺には思えないのだが……。いくらライバルであっても、あいつが優しい教師だというのは俺だって認めているつもりだ。」

「でもそれ酷くねえか？」

「いや、でも多分俺、そうでもしないと素直になれなかったと思う。事実、そのとおりだった。あの日遠藤と話さなければ自分の気持ちをアンナに伝えようなんて腹くくることなんてなかったと思うから。」

「どーりで最近アンナへの態度変わったんだ」

「そうそう。昨日ぶつちやけちまったし、もう後には引けねえ」

「そして、昨日コウが先に教室に戻ったあとにアンナと香苗の前で起こったことを話してみせた。」

「お前、それどっからどう見てもバレバレ」

「だから後にはひけねえって言っただろ。ったく、どうすりゃいいんだよ。遠藤には白鷺祭のうちに告白するって約束しちゃったし……」

「…」

「お、浩一、春樹。お疲れ様」

そこで当の本人が登場してしまう。やっぱりこの人はいちいち空
気読みすぎだ。

「あ、先生、お疲れ様です」

コウが礼儀正しく挨拶をする。そして先生はちらりと俺を見やり、
「お前、今日こそは頑張れよ」

といちいち励ましてきやがった。余計なお世話だつての。

そして翌日。

蛍の光が流れ、白鷺台中学校の第10回白鷺祭兼創立記念式典は
幕を閉じた。けどまだ俺の白鷺祭は終わっていない。そう、やり
残したことがあるんだ。

遠藤との約束、アンナへの想い。

よし。

俺は腹をくくって教室に戻ると、アンナに声をかけた。

「なあ、アンナ、今時間いいか？」

心なしかアンナの頬には赤みが差しているように見えた。怯える
様なそぶりも見せない。香苗が何か余計なことでも吹き込んだのか
もしれない。

「うん、いいよ。急にどうしたの？」

首を傾げるアンナの手を引いて、校舎のちょうど奥にある階段ま
で向かう。

人気のない、夕暮れの階段。絶好のシチュエーションだった。た
とえ、振られることが確実に分かっても。

「今まで素直になれなくて傷つけてゴメンな。本当は、俺、お前のことが……」

しかし、俺の伝えたい言葉の全てを言わせてはもらえなかった。

「ごめんなさい」

その影に遠藤の姿を見た俺は、思わず逆上してしまう。違うんだ、こんなことしたくないのに、俺は！

「お前、まだ遠藤遠藤言ってるのかよ！ いい加減目を覚ませって！俺があんな奴忘れさせてやる、アンナがあいつのことで苦しむのは一番嫌なんだ！」

杏奈の瞳の色が変わった。物理的ではなく、精神的なもので。

「ハルちゃん……」

そして、いつかのように力なく微笑むと、

「ハルちゃんの言いたいことはわかるし、もしかしたらその方が幸せになれるかもしれない。でも、やっぱりあたしには遠藤先生しかないの。だから……ハルちゃんの気持ちには応えられないよ。ごめんね」

アンナは自分に言い聞かせるかのように、そう言い切った。

生徒会のほうの撤収時間は5時だ。それまでに生徒会の展示室に行かなければならない。その道中で見慣れた後姿を見つけた。コウだ。とても辛かったが、親友として一応報告はしておいたほうがいいだろう。

「コウ」

背後から声をかけると、そこにいたのはやはりコウだった。情けないことに、俺はこみ上げてくる涙を必死にこらえながらコウに事実を伝えることになった。

「なあ、コウ。やっぱりダメだった」

その言葉が、全ての結果を物語っていた。傾きかけた陽の光が、なぜか無性に寂しく感じた。

「ダメだったとしても、頑張ったじゃないか。あいつに意地悪してた頃に比べたら、すげー進歩だぜ」

コウは俺の肩をぽんと叩き、笑顔を見せる。そして、そのまま一緒に展示室に向かった。アンナは、そして遠藤はどんな表情で俺たちを迎えるのだろうか。

今日は白鷺祭の代休で学校が休みの日。これから香苗と一緒にお茶することになっていっているんだけど、あたしの頭の中は昨日のことです。いつばいいつぱいだった。

「俺さ、アンナのこと、好きだ」

「もーっ！ハルちゃんの馬鹿馬鹿！」

昨日の記憶を必死で消し去ろうとするけれど、できない。

いくらなんでもハルちゃんの言葉にはインパクトがありすぎた。今までいるんな人に好きといわれてきたけれど、どうしてかハルちゃんの言葉だけが頭にこびりついて離れないんだ。今まで意地悪されていたギャップから来るのか、違う理由なのか。あたしにはわかりかねた。

遠藤先生の奥さんは昨日私も見るようになった。すごく綺麗な人で、あたしなんかかないっこないなと思う。お子さんもかわいらしかった。

ああ、やつぱりあたしじゃダメなんだな。遠藤先生にはあたしより大事な人がもういるんだ。そう思い知らされた気がした。

遠藤先生に今度こそは気持ちを伝えようと思っていたけれど、やめた。それほど遠藤先生の奥さんを見たことがシヨックだったのと、迷惑をかけることなんてできないなという想い。

気持ちを伝えないほうがいいことってあるんだ。そう思った矢先にハルちゃんに呼び出された。

そして、あの言葉だ。思えばおとといからハルちゃんは何かおかしかった。遠藤先生になんか負けない、なんて言ってたつけ。もしかして、とは思っていたけど、本当にそうだったなんて。

意地悪だからハルちゃんは嫌いだったけど、いざあの言葉を聞く

とハルちゃんへの見方が変わってしまう。今までどおりに接する」とはもうできないだろう。

香苗なら信頼できるから、あたしは香苗に事の顛末を全部話した。「やっぱりそうだったか……そうだろうとは思ってたよ」

「うん……なんか、どうしたらいいかわかんないや」

カフェラテにガムシロップを入れてカラカラとかき混ぜながら言う。

「で、遠藤先生のことはまだ好きなの？」

香苗の質問に言葉を詰まらせてしまう。今のあたしには難しすぎる質問だった。

「えっ……」

「えっ、て何よ。まだ好きなんじゃなかったの？あたしはてっきり」

「よくわかんないの」

正直に胸のうちのうちを伝えた。そう、よくわからないというのが本音だ。

白鷺祭の後片付けのときも、ハルちゃんの言葉についてばかり考えていて、遠藤先生のことなんて頭から飛んでいった。

もちろんあたしは遠藤先生が担任のクラスだから、生徒会でも教室でも遠藤先生と関わっていたんだけど、なぜか前ほどときめきを感じなくなった気がする。

ハルちゃんからの言葉に戸惑っているだけなのか、本当に遠藤先生への気持ちさがさめてしまったのか。あたしにはわからなかった。

何より、遠藤先生の奥さんと子供を改めて見てしまったことがショックでならなかった。今思うと、それはあたしへの警告だったのかもしれない。「もうわたしの夫に近づかないで」という警告。

「なんかね、白鷺祭の後片付けのときも、ハルちゃんの言葉についてばかり考えていて、遠藤先生のことなんて頭から飛んでった。

もちろんあたしは遠藤先生が担任のクラスだから、生徒会でも教室でも遠藤先生と関わっていたんだけど、なんか前とは違う感じがす

る……気持ちが悪くならないの」

「うんうん」

香苗が続きを促す。

「ハルちゃんから好きって言われて戸惑ってるだけなのか、本当に遠藤先生への気持ちが悪めてしまったのかわからないの。……何よ、遠藤先生の奥さんと子供を改めて見たのがショック。今思うとそれってあたしへの警告だったのかもしれない。もうわたしの夫に近づかないで」って」

「そうか、よくわかんなくなるのも当然だよな」

頷きながら、香苗がカフェラテを一口だけ口にする。少し苦そうな表情をしていた。カフェラテが苦いのかあたしとそれを取り巻く今の境遇に対して苦々しい思いを抱いているのか。

「ガムシロップ、もってこようか？」

「うん、ごめん、お願い。持ってくるの忘れちゃった」

きつと香苗が抱いている思いは前者に違いなかった。あたしがガムシロップを持ってきたところで話を再開する。

「結局遠藤先生には告白しなかったんだ？」

「うん、しなかった。できなかった」

すると香苗は心底驚いた表情で、もう一度あたしに確認してくる。

「なんで？あんなに迷ってたのに」

それはそうかもしれない。あたしは前の日に散々「遠藤先生に告白する」だのとこねていたんだから。

「よく、告白されたほうは幸せって言うでしょう？でも先生の場合はそれが当てはまるのかな、って。決まった人がいるのに告白されても困るだけじゃないかな、って」

「アンナ……」

一瞬香苗は言葉を切り、

「それってすごい前進だと思う」
って言うてくれた。

「先生にとって何が幸せか、わかった気がするんだ」

「そうだね。アンナはすごく頑張ったよ」

「で、香苗はどうするの？」

「あたしはー……何もナシかな。今の雅弘見てるだけで十分楽しい幸せだから」

でも、あたしには香苗が無理しているのなんてお見通しだった。

結局その日はひたすら失恋トークに花を咲かせていたあたしたちでも、あたしたちの失恋は悲しい失恋じゃない。前向きに変わっていくための失恋なんだから。

家に帰ると、メールが一通届いていた。ハルちゃんからだ。

「昨日のこと、本気だから」

短いメール。もう今のあたしは、その駄目押しにすら動じなくなっていた。

Mission 13 夏休みの苦行（語り部：雅弘）

夏期講習。それは俺たち3年生にとってトップレベルの苦行ともいえよう。何せ夏休みのうちの1週間が授業で潰れてしまうのだ。面白く思っちゃつはない。

だからというわけではないが、俺はなんとなく外を眺め、女子テニス部の練習を眺めていた。佳織ちゃんが必死で練習に打ち込んでいる姿に感心してしまう。前に生徒会室に来たときにはあんなに怯えていたのに、すっかり人格が変わったような印象すら受ける。

今は国語の時間。意味のわからない漢文をツカが黒板に書き終えたあとで、問題を出す。

「……ではこの漢文を書き下し文にしる。穂積」

スパルタ教師で知られるツカはかなりレベルの高い問題をもってきていて、ほとんどの生徒が答えられずにいた。きょうも鬼のように長い漢文を訳さなければいけない状況。予習なしでは到底答えられない。

「えつ、と……」

「では、大森。この一文を書き下し文にしる」

答えられない俺は完全にスルーされてしまった。ツカに示されたのは、「天生麗質難自棄 一朝選在君王側」の一文。訳せるかこんなもん。

でも、うちのクラスでも成績トップの大森さつきは、あっさりこの問題に答えてみせる。

「天生の麗質自ら棄て難し、一朝選ばれて君主の側に在り」

「模範的な解答だな。座つてよし」

……うん、まったくもって意味がわからない。

「まったくよー、なんだって夏休みにまで授業受けなきゃいけないん

だよ」

そして放課後。俺は生徒会室の指定席に突っ伏して夏休みの減少を嘆いていた。それはハルも同様で、予習なしで講習に臨むという無謀な行為をしたところ、遠藤に出された問題にまったく答えられなかったらしい。

「そんなこと言ったって仕方ないツスよ、穂積先輩。オレたちだって来年はそうなる宿命なんですし」

「このぐらいで音を上げていたら、受験大変ですよ？」

部活のために学校に来ていた2年生2人から即座に突っ込みを受ける俺たち（なぜかハルも巻き込んでみる）。

「まったく遠藤もさりげなくスパルタだもんな。俺当てられた所答えられなかったぜ」

「それは予習をしないお前が悪い」

即座にコウから飛ぶツツコミ。まあ、俺も人のことは言えないんだけどな。

「ところで夏休み直前の模試の結果出てたけど、どうだった？」

今度は模試の結果をちらつかせながら香苗が言う。

「あたしは相変わらずB判定」

アンナの第一志望は県内トップの進学校。ここはやっぱりアンナだな、という感じだ。ただその高校がB判定なら県内の高校は全て受かると思うのだが。

「アンナのはレベルが違うんだよ。俺C判定。すげー微妙」

かく言う俺は高専の機械科を受けることにしている。国立の高専だから微妙にレベルが高く、存在を知っている者だけ受験するような感じだから、この中学から高専に行こうと考えているのは俺含めわずかである。

「僕はA判定」

あっさりと答えるコウ……なのだが、コウの場合は進路決定者といっても過言ではないので模試の結果などどうでもいいのだ。話では情報学科に在籍することになるらしい。

ちなみにこの学校からはハルにもスカウトが来ていたのだが、家庭の事情で近所の総合高校を志望しているようだ。

「あたしもA判定……まさかハル、Eとか言わないでしょうね」

香苗は安全圏の高校の中でも比較的レベルが高い学校を選んでい
る。そりゃA判定だ。対してハルはというと、やはりというかなん
というか……。

「聞くんじゃねえ……」

言いながらガツクリ肩を落とす。それは例によってE判定だった
ことを意味する。ハルのE判定はもはや恒例といってもいいぐらい
だが、本当に大丈夫なのか？

「先輩たち皆将来のこと考えてるんですね。オレは……人文科のあ
る学校に通いたいです」

「私は看護科のある学校に行きたいです。看護師になりたいって気
持ちは揺るぎませんから」

もしかしたら2年生の二人のほうがちゃんと将来を考えてるんじ
ゃないかと思う。ナツツンは小説家になりたいと言っていたし、萌
美ちゃんが看護師になりたいのは周知の事実だ。

俺はなんとなく、「変わってるから」、それだけの理由で高専を
志望している。機械とかそういうものに興味があるのも事実。だ
がしかし、そこから先はまだ決まっていない。きつと就職するのだ
ろうけど、高卒就職って正直どうなんだろうという気持ちはある。

そんなある日、俺は生徒会室でのんびりと外を眺めながら人を待
っていた。その相手は香苗。香苗とは幼馴染で、お互いのダメなと
ころもいいところも散々見てきているから何でも言い合える仲、で
ある。

生徒会室のドアを叩く音。香苗だな、と即座に判断してドアを開
けようとする、が先に香苗が生徒会室に足を踏み入れていた。

「あはは、ごめんね、急に呼び出したりなんかしちゃって。ちょっ
とさ、相談したいことがあるんだ」

心なしか香苗はいつもより元気がない、ように見える。そしてそれは気のせいではなかった。少し考える風なそぶりをしたあとでいつもの席に座り、話を切り出した。

「将来のビジョンが明確でないのは悪いことなのかな。あたしは将来理系の大学に進んで研究員になりたいって思ってる。でもそれは明確じゃなくて、なんていうか……すぐぼんやりしてる、って言えばいいのかな」

そんな香苗に、いつもより少しだけ優しく返事をする。

「ぶっちゃけそこは俺も悩んでるな。高専って5年だろ？なんかどつか中途半端な気がしないでもないし、将来の道は機械関係の何かしかないんじゃないか」

「なるほどね……外見は違うけど悩みの中身は一緒、ってことか」
うんうん、と頷く香苗。だが、俺はどうしても言いたいことがある。あった。

「でも俺は高専第一志望にしたこと、後悔してないぜ」
「どうして？悩んでるのに？」

香苗が目を丸くして尋ねてくる。そりゃそうだ。悩んでるのに後悔してないっていうのもある意味変な話だ。

「変わったことが好きだから」
至極あっさり、その理由を述べてやる。

「馬鹿言ってるんじゃないの」

俺の言葉に香苗も微笑むが、その表情に陰があることを俺は見逃さなかった。

「いいじゃねえか。俺がこの学校入ったのだから……」

一瞬言葉を切ると、

「普通の中学じゃできないことがたくさんできるからだよ。高専も一緒」

そう言い切った。

「なるほどね……」

香苗も3秒くらい間を置いて、

「ありがと。忙しいときに呼び出して悪かったね」

そう言つと指定席から立ち上がる。やはり今日の香苗は何かがおかしかった。

「おう、大丈夫だから。いつでも相談に乗ってやるぜ」

「うん、じゃあね」

じゃあね、という言葉、そして生徒会室のドアを後ろ手に閉め、数秒後に走り出す足音。なぜか、俺の中の何かを拒否しているように感じたのは気のせいだろうか、それとも……。

「あいつ、あーやって猫かぶってるんだけど実は結構打たれ弱いんだつたな……」

と、意味もなく過去の思い出を回想する俺だった。

そして夏期講習最終日は進路志望調査の締切日。初日に「これだ将来が確定するといつても過言じゃないから真面目に書けよ」と担任に渡されたもの。

俺は結局第一志望はそのまま工業高専の機械科、第二志望は地元工業高校の機械科、ということ調査票を提出した。

「もう少し頑張りが必要だな、でもお前ならできると信じているぞ」「はい」

担任の言葉に力強く返事をする俺。もう迷いなどなかった。

相変わらずのことだが、理事長の話は長いしくだらしない。生徒会役員席で思わずあくびをかみ殺してしまう僕。そう、今日から2学期が始まる。

夏休み中に行われた模試の結果も今日渡されるとのことです緊張する、とハルは話していたな。僕の提案でアンナから特別講習を受けたらしく、前より問題が解けているのは確かだが、自己採点ではまいちだったらしい。

ふと思いついて各クラスの委員長（一番前に立っている生徒だ）を眺めていると、そこに見知った顔があった。確か、浅田佳織さんって言ったっけ。マー坊が惚れてる子。

生徒会室に来たときにはあんなにおどおどしてたのにクラス委員長を勤めているのか。さすがが主席入学者棚、と思う。

そして、生徒会にもわかに忙しくなる。……白鷺祭ほどではないけれど。忙しさの元凶は、10月に行われる体育祭、そして11月の生徒会役員選挙。

生徒会役員選挙が終われば僕たち3年生はお役御免になる。12月からは1年生と2年生で新たなスタートを切ることになるというわけだ。

そして、今日の放課後も生徒会室での活動が行われているのだ。た。

「じゃあテーマのアンケート用紙、アンナ、打ち出せる？」

僕が尋ねると、アンナはお決まりの返事をしてノートパソコンを器用に操作する。

「大丈夫だよ、白鷺祭のをちょちょっといじればいいだけだから」

「明日までには出せる？」

マー坊、それは無茶じゃないか？とは思っただが、もう時間がな

い。いままで見てみぬ振りをしていたつけが回ってきたと言つものだ。

「任せといて」

とはいってもアンナの顔には疲れの表情が色濃く見える。マー坊も無茶な締切を出したものだ。なんだか見ていられないじゃないか。

実は僕のほかにアンナの身を案ずる者がもう一人いた。無論、ハルである。そこで翌日の昼休みにハルを誘って、アンナを手伝いに行くことにした。

僕たちが生徒会室に着いたのは、ちょうどアンナが生徒会室のコピー機でアンケート用紙を印刷していたときだった。

「昼休みまで仕事か？」

ハルが少しぶっきらぼうに、でも優しさをたたえた声で尋ねると、「だってマー君が『今日の放課後には渡せるようにしたいからー』って」

「ったく、もう一人の書記は何してんだよ」

思わず毒づいてしまう。あとから聞いた所によると、ナツツンは友達とバスケに興じていたらしい。勿論後で遠藤先生の必殺技「モミ」が飛び出したのだが……。

「なんか俺たちで手伝えることあるか？」

「じゃあね、コレ半分に切るから、切り終わったものをクラスごとに分けて欲しいの」

「オツケー。ほらハル、言いだしっぺはお前だろ？キビキビ動けって」

そういつてハルをせっついてやる。

「おうよ！こんなもん気合と根性で何とかなるって」

さすがに書類の作成に気合と根性はいらなと思うが、そこはハルだ。アンナにちょっとでもいいところを見せたいのか腕まくりまですしている。

結局、ハルとアンナの頑張りのため、昼休みがたつぷり余るほど

早く終わってしまった。マー坊はこれも見越していたのだろうか？
いや、あいつのことだから何も考えてない気がする……。

「で、これはどうするんだ？」

「職員室にある各クラス宛ての書類棚に入ればいいんだけど、それはあたしがやるよ」

「そうか、わかった」

さすがにそこまでは僕もやり方を知らないし、アンナに任せただけが妥当だと思う。しかしハルの思いは違っていたようだった。

「えー？俺たちの出番はもうなし？」

「だって、これくらい自分でやらなくっちゃ書記としてのプライドガタガタだよ」

書記としてのプライド、実にアンナらしいと言えるらしい。

「プライドとかそんな関係ねえだろ」

「うーん、じゃあ、あたしがやりたいからやってる」

いかにもとってつけたような返事である。

「じゃあってなんだよ、じゃあって」

結局、アンナの手からプリントを半分ぐらい奪い取り、職員室の書類棚までプリントを持っていく作業も手伝うことになり、アンナはそれこそ恐縮しきりだった。

LHRの時間は、体育祭の出場競技を選ぶことになっている。

僕は迷わず1000メートル走、綱引き。400メートルリレーを選択した。

「みんなは何の競技に出るんだ？」

生徒会のいつもの集まりで、それとなくみんなに尋ねる。

「あたしは今年も保健委員。だから競技も必要最小限の100メートルだけだよ」

そう言うのは香苗である。

「あたしは……200メートルと障害走、あと綱引きだよ」

小柄なアンナが綱引きとは、もしかしたらこのクラスは誰も綱引きをやりたがらなかったのかもれない。そういえばアンナは、去年200メートルで1位をとっていたな。

「俺は100メートル、障害走、騎馬戦だな」

騎馬戦と言うところがハルらしい。そして100メートルに出るといふことは向かうところ敵なし、といったところか。

「あ、俺も騎馬戦と綱引き」

そう言うのはガタイのいいマー坊。さすがである。

「私は障害走だけです」

体力のない萌美ちゃんにはクラスメイトからの配慮があつたらしい。それに、彼女には入場行進などの吹奏楽部の演奏もある。

「俺は200メートルと騎馬戦、あと400メートルリレーっス」

ナツツンも文芸部員ではあるが、意外に体育会系でもある。

ついでに言うなら応援合戦は生徒全員が参加、遠藤先生と手塚先生も職員対抗リレーに参加するらしい。これは体育祭が楽しみだ。最後の体育祭、思う存分楽しもうじゃないか。

そして訪れた体育祭当日は、10月とは思えない猛暑。さすがの理事長や審判委員長も汗を拭きながら「熱中症には気をつけるように」と何度も繰り返していた。

最初は男子100メートル。1年生から始まり、最後は3年生。

ハルがスタートラインに立つと、女子生徒から黄色い歓声が沸く。しかしハルの視線はただ一人にだけ注がれているのが僕にもわかる。

そう、アンナだ。

「用意」

パン、とピストルが打ち鳴らされると同時に、陸上部で3年間培われた完璧なフォームで走り出す。他の組もハルがここで走ると思つて精鋭を揃つて出してきたようだが、それすらもハルの走りの完璧さにかすんでしまう。

やがてハルがゴールテープを1番に切り、「1」と書かれた旗を

係の教師からもらう。仕上げにガッツポーズをとり、「うっしゅあ
あああ！」と叫ぶと、再び女子生徒からの黄色い歓声。アンナも友
人とハイタッチなどしている。

そしてアンナの走る女子200メートル走……となったわけだが、
アンナの様子が明らかにおかしい。指先で頭を抑えたかと思ったら、
今度は吐き気を我慢するかのように口に手を当てる。もしやこの暑
さにやられたのではないだろうか。

それでも容赦なくそのときはやってくる。ああ見えて負けず嫌い
なアンナのことだ、絶対に棄権などしないだろう。

「用意」

ピストルの音が、今までになく無慈悲なものに聞こえた。アンナ
はふらつきながらも必死で手足を動かしているが、途中二人に追い
抜かれた。ここもアンナが出てくるというので精鋭を揃えたのだら
う。

やがてアンナは3位でゴールし、「3」と書かれた旗を受け取っ
た瞬間その場にくずおれた。

「保健委員！急病人が出たから場所を確保してくれ！」

保健医と遠藤先生が叫ぶ。ゴール地点からは「藤原さん！」と女
子生徒の悲鳴。本部席に目をやると、とっくに競技を終えた香苗が
てきぱきとアンナの手当ての準備を進めていた。そしてハルを始め
とした生徒会メンバーの絶望的な瞳。

アンナは保健医と遠藤先生の手によって担架で木の陰に運ばれ、
額に冷却シートを貼られている。やはり暑さには勝てなかったのだ
ろう。アンナは泣いて悔しがらるるが、結局団長のハル率いる青
組は、障害走に補欠の生徒を出さざるをえなくなった。

そして1000メートル。僕が出ると聞いたほかの組は同じ陸上
部のライバルや運動部でもトップクラスの实力を持つ人物を集めて
きたらしい。だがしかし、僕だって負けていけない。

「用意」

ピストルの音と同時に走り出す。僕は陸上部で3000メートルに出場していた身だ。いつもの3分の1の距離を走るのだ、負けたら恥をかく。安定したペースで走るだけで他の選手との差をどんどん離していき、ラストスパートをかけてゴールを決め、「1」と書かれた旗を受け取る。女子生徒の歓声には見向きもせず、次に行われる騎馬戦の様子を見ることにする。

騎馬戦。このときのハルの気合の入れっぷりは尋常じゃなかった。マー坊やナツツンの帽子さえ遠慮なく奪い取りつつ、自分の帽子にも気を遣う。ダントツだ。まるでアンナの方まで俺が頑張ってる、とでもいうように。

やがてホイッスルが鳴り響き、アナウンス担当の放送部員が叫ぶ。「試合終了！保坂選手率いる青組が勝利を飾りました！」

大歓声に一気に身体の力が抜けたのか、ハルは下ろしてもらったその場でへなへたとへたりこんでしまった。あいつにしては珍しい。

教室で弁当を食べたあとは、旧制服に着替えて応援合戦の準備をする。うちの学校の制服はかなり特殊な形状のため応援合戦には向かない。そこで出てくるのが急制服。見慣れた生徒たちもなんだかいつもと様子が違って見える。

応援合戦。手に血豆ができるほど猛練習をした大太鼓を激しく鳴らし、生徒のサポートをする。各組も個性的な出し物をしてきて見る者を楽しませる応援合戦は、うちの中学の体育祭最大の見所、といても過言ではないだろう。

ハルの組では相変わらずハルが半裸で青い旗を持って走り回っている。

その後も競技は順調に進んでいき（手塚先生がリレーで転んだのにはビックリしたが）、結局優勝したのはハル率いる青組。

ああ、終わったのか……そう思い、生徒会メンバーの表情を一人一人ゆっくりと見ていく。香苗は他の女子生徒と抱き合って涙を流し、アンナは下を向いたままで表情は伺えない。対してハルは「全てやりきった」とでも言うような満足げな表情。ナッツンはさすがに疲れたようで、それが表情にも色濃く現れている。

遠くでは吹奏楽部が後片付けをしているのが見える。萌美ちゃんもそこにある。僕たちにとっての最後の体育祭。みんなにとつては、どんなものだったのだろうか。

11月。

あの日見えていた桜の木はすっかり紅葉し、もうすぐやってくる冬の訪れを、そして、生徒会役員の任期終了をあたしたちに教えてくれていた。生徒会役員選挙の立候補はもう締め切っていて、あとはあたしたちの最後の仕事が残っている。

あたしは立候補者の名前をチェックしながら生徒会だより臨時増刊号に打ち込んでいき、夏岡君はあたしが作った原本を基に投票用紙を作成していた。

そこであたしは見知った名前をまたもや見かける。

「書記 浅田佳織」

「佳織ちゃん、書記に立候補してたんだ」

知っていたこととはいえ、やっぱりあの日の脅えた表情が忘れられず、大丈夫なのかな、と心配になる。

ちなみに2年生の生徒会役員の中では、生徒会長に夏岡君が、副会長には萌美ちゃんが立候補していた。

そして応援弁士として夏岡君にはハルちゃんが、萌美ちゃんには香苗が、そして佳織ちゃんにはマー君がついていた。

本当は責任者も決めなきゃいけないんだけど、この3人に関して決まっていない状況。そこであたしとコウ君に白羽の矢が立たわけだけど、あたしはコウ君の仕事を手伝いつつ、ハルちゃんと一緒に夏岡君をもサポートするという大変な仕事を任された。

あたしは夏岡君のそばで毎朝あいさつ回り。ハルちゃんは応援弁士ということでその文章を書き上げなければいけなかった。いわばマニフェストを発表するようなもの。ハルちゃんの重圧は半端じゃ

ないものがあつた。

そして、生徒会選挙の裏側でも、ものすごくめまぐるしく物事が回っている。

萌美ちゃんと夏岡君は立候補した手前自分たちのことで精一杯だし、応援弁士をする残り3人に仕事を頼むのも何だか申し訳ない。そんなわけで、生徒会室で雑務をするのはあたしとコウ君の二人になる機会が多くなった……というかほぼ全ての作業をコウ君と二人で、もしくは遠藤先生にも手伝ってもらっている。

投票用紙は文化祭や体育祭のテーマのものと違い、ちょっと上質な紙を使う。A4の紙を4等分にするように投票用紙を生徒会室のパソコンで作っていく。

あたしのノートパソコンの生徒会に関するデータは全部このデスクトップパソコンに移動した。またひとつ、生徒会役員の任務が終わりそうなんだなと実感してしまう。

「きゃっ！」

突然首筋に冷たい感触を覚え、変な声を上げてしまう。振り返ると、そこにいたのはコウ君。

「僕だよ、僕。気分転換にはなつた？」

「気分転換も何も、びっくりしたよ！」

ほっぺを膨らますと、コウ君は何が面白いのか笑い出す。

「もう！何で笑うのー？」

「いや、ずーっと石になつたみたいと同じ格好で作業してるからさ。疲れないかなって」

イタズラかと思ったら、単にコウ君なりの気遣いだったみたい。ディスプレイの横にはあたしの大好きな冷たいミルクティーの缶が置かれていた。

「それ、飲みなよ。ホントにアンナは集中するとどこまでも止まらないからな」

「ありがとう、でも、そうかなあ」

缶のプルトップを開けて、ミルクティーを喉に流し込む。ふんわりと甘い紅茶とミルクの香りが口の中いっぱい広がって、疲れた脳みそまでも癒していくみたいだった。

「白鷺祭のとき徹夜して生徒会室で居眠りしてたのはどこの誰？」
「うう……」

白鷺祭直前に生徒会室で一人で仕事をしていたときのこと。徹夜続きですっかり疲れて居眠りしていたあたしをコウ君が手伝ってくれたことがあった……というか強制的に手伝わってしまった。そのときのことを思い出すとぐうの音もでない。

「投票箱は縦割りで投票するから4つでいいよな？」

「うん、投票箱は4つだよー」

ミルクティーを飲みながらコウ君に言う。何だかあたしのほうが立場が上みたいで申し訳なくなってしまうた。

「あと必要なのは……」

「掲示物、当選者の所にお花貼るあれ。あたし習字苦手からお願いしてもいいかな？」

書道は大の苦手だ。普通に文字を書くだけなら得意なんだけど、あのやわらかい筆と墨を使って文字を書く、というのがどうにもうまくいかない。

「わかった」

するとコウ君は一旦生徒会室を出て、しばらくしてから習字道具一式を持ってきた。そして大きなロール方眼紙を適当な大きさに切り、下書きを始める。

そこまで見届けてから、あたしは作業を再開させた。

「よし、できた……っと」

しばらくあたしもコウ君も自分の作業に没頭していたんだけど、先に言葉を発したのはあたしだった。プリンターで投票用紙4枚組セットを打ち出し、上質紙っていうのを使いコピー機で印刷して裁

断すれば完成だ。

「もうできたのか？」

「うん、差し入れのおかげで進んだよ。ありがとうね」

「だったらよかった」

そういつて笑顔を見せる。その笑顔にさすがのあたしも一瞬引き込まれそうになってしまった……なるほど、コウ君やハルちゃんも現役のときは陸上部に女子生徒のギャラリーが絶えなかったわけだ。そして、気を取り直すとコピー機に上質紙をセットして印刷を始める。えーと、4クラスが3学年で、1クラス40人だから……。あれ、あれね？

「480枚。暗算できなかつたんだろ」

暗算が苦手なあたしの代わりにコウ君が計算してくれた。

「うん……ありがとう」

コピーしている間も会話はなかった。コウ君は本番とでも言わんばかりに筆を振るっている。ものすごく集中しなきゃいけない作業だから、邪魔しちゃいけない。

と思った矢先、コピー機が紙詰まりを起こしてしまった。まだ半分も行っていないのに……。しかも液晶画面を見たらすごく変なところに紙が詰まっていて、あたし一人では取り除けそうになかった。

「あーあ……これ遠藤先生か手塚先生じゃないと取れないや」

「一つため息をつき、」

「ちよつと先生呼んでくるね」

そう言つと生徒会室のドアを開け、職員室に向かうことにする。幸いというかなんというか遠藤先生はいなくて、結局手塚先生に手伝ってもらうことにした。

「生徒会室のコピー機もそろそろ10年物だからな。職員室のお下がりだから仕方がないが」

などと言いながらゴソゴソとコピー機の中を開ける。さながら解体作業だ。結局詰まった紙は手塚先生の手によってぐちゃぐちゃの

状態でコピー機から発掘された。

「これでいいな。また詰まると二度手間三度手間になるから印刷が終わるまでここにしよう」

「コピーは順調に進んでいく。紙詰まりしたせいで何枚あるかわからなくなっただけ、数えてみたらちょうどいい枚数になった。それを見届けると、手塚先生は、

「では気をつけて裁断機を扱うように」といって生徒会室を去っていった。

次はその日の放課後だ。あたしとハルちゃんは二人でうんうん唸りながら原稿用紙を見つめ、文章をどんなふうにもとめるか考えていた。

「元書記の藤原さんのサポートをよくしてくれていました、とかそんな感じにすればいいの？」

「それは欠かせない要素だよ。まあ他に立候補する人いないもんね、あんまり考えすぎないであたしたちが普段見てる夏岡君の様子を書けばいいんじゃないかな」

そう。今回の選挙は選挙戦ということにはならず、形だけの選挙ということになる。それでも得票数が足りないと容赦なく落選となる。

「白鷺祭の準備のとき、文芸部も忙しいのに生徒会の仕事も手を抜くことはなかった、とか？」

「まあな、ちよつとぐらい過大評価してもいいだろ。だってあいつ議事録書きながら小説書いてたぜ」

「あはは、あたしなんてあんまりにも過大評価されすぎて困っちゃったよ」

そんなあたしにハルちゃんは盛大にため息をつき、

「お前のは全部ガチなの」

なんて言って豪快に笑う。実にハルちゃんらしい。でも、全部ガチって言われても困るなあ……。

「成績超優秀、超絶美少女、運動神経抜群、尽くしまくる性格……生徒会役員として完璧じゃないか。まー遠藤目当てだったのは気に食わなかったけどな」

「あ、ごめん……」

「ま、今となつちゃそんなことどうでもいいんだよ」
しよげたあたしの頭をぼんつとやって、

「うっし、じゃあ再開しようぜ」

と、一瞬で真剣な表情になる。その表情に、コウ君の時と同じく一瞬ドキツとしてしまった。ハルちゃんは皆が認める超美少年。成績はイマイチだけど、陸上部での活躍と開けっぴろげな性格で、女子生徒からはものすごく人気がある。あたしは野球部のマネージャーだったし、その頃は遠藤先生のことですっかり頭に熱が上っていたけれど、今ならあの女の子達の気持ち分かる気がする。

結局あだこうだ考えた結果、時間ぴつたりに終わりそうな原稿ができた。原稿を遠藤先生に提出して、そのまま帰ることにする。

「もう暗いからな、春樹、ちゃんと杏奈を送っていくんだぞ。家が近いんだろ？」

「はい、小学校の学区が一緒でしたから」

「じゃあ、気をつけてな。お疲れさん」

そんなこんなで、ハルちゃんがうちまで送ってくれることになったんだけど。なんだか会話しようにも言葉が出てこない。さっきはあれほど喋っていたのに。

「日が短くなつたね」

そんな無難すぎる言葉しか出てこない。

「そうだな。11月だしな……もうすぐ俺らも受験して卒業か」
「寂しくなるね」

ハルちゃんには不思議な力か何かがあるんじゃないか、って思う。何を喋ればいいのかわからなかったあたしからどんだん言葉を引き出していく。

「こつ見えても俺だつて寂しいんだよ。アンナが志望校に受かったら下宿だろ？めつたに帰つてこられないじゃないか」

「長期の休みには帰ってくるよ。電車乗り継げばすぐだもん」

「そうか……」

と口では言いながらも、やっぱり寂しげな表情は崩さない。

ああ、ハルちゃんは本当にあたしのことが好きなんだなあって思う。白鷺祭の告白では「ごめんなさい」しちゃったあたしだけどうしよう、すごく心が揺れてる……。もうあのメールにも動じないって思つてたのに。

「なあ」

しばらく無言で歩いた後、街灯の下で突然立ち止まり、あたしに声をかけてくるハルちゃん。

「どうしたの？」

答えて振り向いた瞬間だった。妙に家にたどり着くのが遅いと思つていたんだけど、おそらくハルちゃんは人通りのない場所を狙つていたんだろう。

ハルちゃんはあたしの腕をつかんで自分のほうに体を向かせ、突然キスしてきた。

「！」

どれぐらい時間がたったか分からなかった。一瞬のような気もしたし、馬鹿みたいに長い気もした。

やがて唇を離れたハルちゃんが、ものすごく申し訳なさそうに微笑んだ。

「ハハ、ゴメンな」

そこからはまた会話もなく、ハルちゃんはちゃんとあたしを家まで送り届けてくれた。

「じゃあ、また明日ね」

「ああ、じゃあな」

傍から聞いていてもわかりそうなほど、ぎこちない挨拶だった。初めてのキス、か……。ハルちゃんが……。こうなるともう意識せ

ずにはいられない。明日どんな顔をして会えばいいかわからなかった。

Mission 16 中学生生活最大の壁（語り部：春樹）

結局生徒会役員選挙は、誰も落選者を出すこともなく終わった。

新しい副会長に業務引継ぎをすることになったのだが、副会長の仕事といえればせいぜい生徒総会や生徒集会の挨拶ぐらいしかない。ただ、会長……つまりナツツンに何かが起こったときは代役を務めることになるからその辺は覚悟しておくように、という部分は強調しておいた。

そして、俺たち3年は受験一本の生活が始まる。

冬休みははつきり言っていないようなものだった。夏休みと一緒に講習があったのだ。今度は夏休みの授業形式とは違い、受験に特化したまさしく「講習」。この辺りはさすが私立中学と思うが、12月には中学の全ての授業内容を終わってしまうから、3学期も講習は続く。

そして、大多数の生徒が受験する私立高校の入試期間が始まった。もう推薦やらなんやらで合格者は出ていたが、その生徒の名前を公表することはなかったし生徒も口をつぐんでいた。まだ進路が決まっていない生徒への配慮だ。もっともコウは進路が決まったようなものだし、講習中に新しい高校のテキストを読んだり与えられた課題を解いたりしていた奴もいた。

アンナもその一人で、滑り止めの女子高には合格していて、理科の講習に真面目に耳を傾けている。まさに鬼の形相だ。県内トップの進学校を第一志望にしているから当然だ。

そしてマー坊は高専に推薦で合格を決めていたが、今は会場で移されたインフルエンザで出席停止を食らっている。災難だった、としか言いようがない。試験本番でなかっただけまだマシだろう。

「正直に言いますと、保坂君の成績だと第一志望は少しきついかもしれません」

最後の三者面談。やはり情けないことを言われた。アンナに勉強を教わっているのに、確実に成績は上がってきているのに。やはり俺の求めるレベルが高すぎるのだろうか。高望みなのだろうか。

「ただ、最近の頑張りを見ると十分巻き返せるチャンスはあります。勝負をかけてみるのもいいかもしれませんね。まだ県立高校の願書を書くまでには時間がありますから、それまでに結論を固めたほうがいいでしょう」

それはつまり、志望校のランクを落とせということか？いや、それはできない。アンナにも失礼だし、何より俺のプライドが許さない。

そうだ。今が本当の「気合と根性」を出すべきときなのだ。

結局俺は第1志望の高校を変更せずに願書を提出し、ひたすら机に向かう日々をすごしていた。あと3日、2日、1日……といったところで、俺の携帯が鳴った。専用に設定している着信音だから、誰からなのかは一発でわかる。

アンナだ。

「もしもし、なんだよこっちは追い込みで忙しいのに……ってアンナか。ごめん、着信誰からか見てなかった」

などとうそぶく。しかし電話の向こうの雰囲気は明らかに異様だった。アンナがすすり泣く声が聞こえるじゃないか。

「ごめんね、邪魔するつもりはなかったの……」

「ちよっとお前、何で泣いてるんだよ」

優しい口調を心がけて尋ねると、一人だけ一泊して受験すること

の心細さ、受験そのものへの不安を語ってくれた。いつも笑顔を忘れないアンナがひどく動揺しているのは、俺からしてもあまりにっらかった。

「そりゃ不安にならない奴なんかいないって。人生の岐路かもしれないんだぜ？」

「うん、わかってる……だから怖いの」

心を決めて、俺はアンナに強く、語りかけた。

「じゃあ、俺が祈ってやる。俺もアンナも、香苗も受かる、絶対受かる、って」

「うん……ありがとう」

電話の向こうのアンナも、少しは落ち着いてくれたようだった。

「じゃあな。お前が泣くのは俺にとって一番哀しいことだから。それを忘れるな。追い込みも無理しないでさっさと寝ろよ」

そうして、どちらからともなく電話を切った。

頼む、神様。あんたがもしいるのなら、アンナを受からせてやってくれ！

手を組んで祈ると、俺は再び机の上の問題集に目を落とし、シャープペンシルで答えを書き込んでいく。

翌日、公立高校の入試が始まった。

全学校で同じ問題を解いて、5教科の合計点と面接で合否を決められる仕組みになっている。俺の目指す高校は5教科の総合点数が300点、というのがボーダーライン。深呼吸して精神を統一させ、試験に臨んだ。問題を一通り解いて、何度もチェックする。そしてそれを自己採点用に問題用紙に書き込んでいく。

だが、昼休みも油断はできない。面接対策に脳内シミュレーションを何度も何度も繰り返し返し（ここは陸上部だった俺の得意技だ）、午後からの面接に臨んだ。

試験が終わったあとは中学に戻ることになっていて、生徒会室のドアを開けるとアンナ以外の3年生が既に集まっていた。しかし俺

が戻ってから大して間をおかずにアンナも戻ってくる、が、やはりその雰囲気は異常だった。

「アンナ、おかえり！どうだった？」

ガタツと椅子の音を立てて香苗が立ち上がる。

「落ち着けよ、香苗。まだわかんないっての」

そんな香苗にコウが即座に突っ込む。いつもの風景。しかしそれがいつもの風景でなくなったのは、

「解答速報の時間だ。教室に戻れ」

ツカの言葉に従い、各自教室に戻って自己採点をしたあとだった。

自己採点の途中からアンナが涙目になっていたのには気づいていたのだが……生徒会室でいつもの面子を見ていたら感情が爆発したようだった。

聞いてみたところ、他の教科こそよかったものの理科で撃沈してしまつたらしい。原因は体調があまり芳しくなく、半分うとうとしながら問題を解いたのが原因なんだとか。

放課後再び生徒会室に集まつた俺たちだが、生徒会室に入った瞬間アンナはあたしは香苗の腕の中で盛大に泣き崩れた。

「杏奈、大丈夫だ。英語の自己採点なんて半分はアバウトなもんで実際にはもつと点が取れることが多いんだ。それで十分巻き返せる。面接の手ごたえもあつたんだろう？」

遠藤の言葉でさえ、アンナには届かない。ただ長い金色の三つ編みを振り乱して泣き叫ぶ。

「でも、でも……！」

「あー先生、この子ちょっとパニックってるみたいなんでそつととしてあげてください。そのうち泣き止みますから」

香苗がなだめるが、アンナの涙はそれでも止まらない。俺はただ自分の定位置だった席でアンナを見守ることしかできなかった。ただひたすらに、もどかしくて、悔しかった……。俺がアンナの涙を止められたなら……。

ぴったり1週間後に、俺は受験した高校の掲示板の前にいた。今日は合格発表。人の波に押されながらも自分の番号「13」を探し出そうとする。最大限の力は出したのだが、正直、望みは薄いと思っていた。だが、あつたのだ。「13」という数字が。目の前に。

「……っしやああああああ!!！」

人ごみの中にもかわらず、誰の視線も気にせず、俺はその喜びを腹の底からの雄叫びにした。そして、さっそく担任である遠藤に電話をかける。

「保坂です」

「ああ、春樹か。どうだったんだ？」

「ありました。俺、受かってました」

表情がほころぶのが自分でもわかる。

「やったじゃないか。最後の追い上げが効いたんだな。皆生徒会室にいるから早く帰って来い」

だが、それだけでは終わらない。生徒会室に帰っていないであろう人物が一人いることを俺は知っていた。いや、それは「本人」も他のメンバーも知っていることだった。あの日の「本人」の取り乱し方は今でも思い出すと心が痛む。

「あの、アンナは……」

その質問を見越したように、遠藤は少し困ったように言う。

「まだ連絡がないんだ。電車が遅れているのかもしれないが……でも、皆大丈夫だと信じて待っているから、春樹も応援してやってくれ」

「……はい！」

俺は遠藤を、アンナを信じて電話を切り、学校に戻ることにした。

俺が生徒会室に入った頃にはてんてこ舞いの大騒ぎだった。先ほ

どアンナから電話があり、無事合格したとの報告がなされたのとこのだった。とつくに進路の決まっていたコウとマー坊も大いに喜んでいたし、香苗も、何より俺も嬉しかった。

アンナ、おめでとう！

と同時に、心の中にもやもやするような感覚を覚えた。それは、きつとそう。

4月には皆に別れを告げなくてはいけないから。

「……よし、これでいいな。あとは練習さえしっかりしてくれればいい。最後の仕事、頼んだぞ」

ツカに励まされ、筆ペンで清書してもらった紙を受け取ると、
「はい、3年間本当にありがとうございました！」

俺はしっかりと一礼し、3年間の思いを一気に声に出す。まだ早
いだろうとツカは苦笑するが、そんなことは関係なかった。ただ純
粋に感謝の気持ちを述べているまでである。

推薦入試で高専の機械科に合格した……はいいが、試験会場でイ
ンフルエンザをうつされてしまった。試験本番にインフルエンザ、
より余程マシだろう、とは思うが。そして1週間の出席停止のあと、
俺はツカと一緒に歴代の元生徒会長が行う「最後の仕事」の確認を
していた。

歴代生徒会長が行う「最後の仕事」 卒業式の「答辞」である。

春、入学式で1年生を相手に歓迎の挨拶をしていたことを思い出
す。それからもうすぐ1年、つてことか。時間が流れるのがこんな
に早かったなんて、俺は今の今まで思ってもいなかった。

同時に、佳織ちゃんとの出会いからも1年が経った。生徒会役員
選挙のときに彼女の応援弁士を勤めたが、やはり最初は先輩に対し
て少し恐怖感を抱いていただけで、実は真面目で明るく、芯の強い
子だった。彼女には絶対に生徒会役員になって欲しくて、寝ないで
応援の文章を考えて彼女をサポートした結果、彼女は無事に生徒会
書記となることができた。

そして、当選発表の日の放課後に、俺は佳織ちゃんに告白された
のだった。まさか俺が、とは思ったが、もちろんその告白を受け入
れ、現在に至っている。もっとも、今は佳織ちゃんはテスト期間だ。
邪魔をするわけにもいかないし、俺は俺で絶対にやらなければいけ

ない最後の仕事がある。それが、この答辞だ。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」
講堂の舞台に立ち、遠藤先生とツカの二人が俺を見守る中、答辞の練習が始まった。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございました。以上をもって、答辞とさせていただきます。卒業生代表、穂積雅弘」

一礼し、壇を降り、席に戻るまでが答辞だ。そこまでの動きもすっかり確認した上で、遠藤先生やツカと打ち合わせを重ねる。講習も受けつつ答辞の練習をする。3月の半ばまで、そんな非日常のよくな日常が続いた。

3月半ば。例年よりだいぶ早く散り始めた桜の中で、佳織ちゃんとともに最後となる登校。

「今日で穂積先輩も卒業なんですな……」
うつむく佳織ちゃんに、なかなか上手い言葉がかけられない。緊張のせいもあるが、卒業は俺たち3年生にとっては絶対に避けられないことだから。

「だ、大丈夫だって、その……学校終わって暇なら、また顔出すからさ。それに、休みにだって会えるし、テニスの大会も見に行く」
実際は暇があるのかどうかすらわからない。高専はそれほどまでに未知の場所。それでもただ佳織ちゃんを安心させたくて、少しだけどもりながらもそんなことを言う。だが、佳織ちゃんは少し頷いただけで何も言葉を発することはなかった。

「卒業生入場」

副校長の言葉と同時に吹奏楽部の演奏が始まり、在校生の間を縫うように入場する。自分の席に着き、卒業式の始まりを告げる挨拶、

理事長や来賓の挨拶と続く。

「送辞、在校生代表、夏岡祐」

「はい」

すっかりとした歩みで壇上に上り、一礼して、ナツツンが送辞を述べ始める。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとうございます。特に先輩方には……」

生徒会役員選挙の後すぐに開かれた生徒総会で、緊張しながら着任の挨拶を述べたナツツンの姿はそこにはない。実に堂々としたいでたちと発声で送辞を述べていく。今では生徒たちの信頼を俺以上に一身に集める立派な生徒会長だ。安心して後を任せられる、というものだ。

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」

くそ、不覚だった。あいつの成長ぶりに涙が出そうになっちまったじゃないか。目の奥がつんとするのをこらえ、

「答辞、卒業生代表、穂積雅弘」

「はい！」

ナツツンに負けてはいられない。最後の仕事、完璧に全うしてやるうじゃないか。

壇上に上り、紙を広げ、言葉をつむぎ始める。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」

3年間、入学したときから今まで馴れ親しんだ講堂を見渡しながら、言葉を続ける。萌美ちゃんが吹奏楽部の席でハンカチを片目にあてるのが見えた。ナツツンも何かを必死に堪えるかのような瞳で俺を見ている。コウやハルのしつかりとした視線、そして今にも涙を流しそうなアンナと佳織ちゃん、それを必死で堪える香苗。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございました。卒業生代表、穂積雅弘」

やりきった。俺は、中学生生活の全てをこの答辞にこめて、壇上から降りた。万感の思い、とはこのようなことを言うのだろうか。最後になる校歌斉唱。再び目の奥がつんとした。

桜の花びらを浴びながら、俺は大きく伸びをした。片手には卒業証書の入った筒。他の荷物や卒業アルバムは昨日までに全て持って帰った。実に身軽である。

それは卒業式が終わって他の生徒会OBOGを待っているときのことだった。

「穂積先輩！」

半ば泣き叫ぶようなその声、もう聞き慣れたような、懐かしさすら感じさせるその声。

佳織ちゃんだった。

「佳織ちゃ……！」

「先輩、私、やっぱり寂しいです……！先輩のおかげで毎日すごく楽しかったのに……！卒業しちゃうなんて、毎日のように会えなくなっちゃうなんて……そんなの、寂しすぎます！」

動揺する俺や周りの視線など気にした様子もなく、俺の腕にしがみついて感情を爆発させる佳織ちゃん。告白してきたときだって冷静さを欠いてはいなかったのに……。俺が卒業してこの学校からいなくなる、そんな現実が彼女の上に重くのしかかっているようだった。

そうだ。俺にはやり残したことがまだあったじゃないか。

俺の制服の袖を掴んで泣きじゃくる佳織ちゃんを抱き寄せ、その髪をぼんぼん、とやって安心させようと働きかける。

「大丈夫。俺が佳織ちゃんのことを忘れるわけがないじゃないか。これからだっていくらでも会える。なんなら引退するまでテニスの大会に顔だつて出すし、学校が忙しくないうちなら放課後に顔を見

せに来ることだってできる。土日だって都合が合えばどこかに出かけたりできる。だからそんなに悲観的にならないでいいんだ」

「あ……言われてみれば、そうでしたよね……」

大きな瞳に涙をいっぱいにためて、俺を見つめてくる佳織ちゃん。そつと指先で涙をぬぐってやると、急に気恥ずかしくなってしまう。「……まあ、そのーえーつと、なんだ……一生の別れってわけじゃないから、そんなに泣かなくてもいいんじゃないのか、ってこと」と、ぶっきらぼうにあさつての方向を見て呟いてしまう。

「雅弘ー！佳織ちゃんもおいでよー！」

香苗の声が背後から聞こえる。おつと、集合時間、だな。

香苗はデジカメ片手にこっちに向かって手を振っている。そこにいるのは3年生の生徒会OB、OGたるコウ、ハル、アンナ、香苗そしてナツツン率いる生徒会役員新メンバー。ご丁寧に遠藤先生やツカもそこにいたし、三脚まで用意されている。お祭大好き香苗のことだから、やりたいことなんぞ一発でわかった。

「おう、今行くー！さ、佳織ちゃん」

手を差し出すと、最初は恐る恐る、でも、次の瞬間にはしつかりと俺の手を握った。そのまま二人で皆のいる場所まで走り出す。

「よーし役者は揃ったね。じゃあ写真撮るよー！」

生徒玄関の前に咲く、ひときわ大きな桜の樹。その下で、新旧生徒会、そして顧問が一枚の写真に納まった。

「つたくよー、いきなりあんな数式出されてわかるかっての」

新しくできた友人に、いつかの夏期講習のときのようにぼやく。

「俺もあんなの中学じゃ習わなかったぜ。白中で習ってないんじゃないか、誰か習ってねえよな」

「つーか、私立出身だけど付属高校なんてねえからやってること他の中学と一緒にだぜ」

高専というのは本当に不思議な場所である。最初の授業で自己紹

介もせずにいきなり難解な、しかも習いもしなかった記号を使った数式を黒板に書き並べる教官がいたり、そもそも教師じゃなく教官という肩書きだったり、小さな機械のサンプルをいじるのにも悪戦苦闘してみたり。

しかし、そんな毎日にもすぐに慣れ、友人もすぐにできた。それが今話している男子生徒だ。そういえば中学時代にバレー部の試合で何度か会った事があって、それがきっかけで意気投合したんだよな。今じゃ一緒にバレー部に入って汗を流す、そんな関係だ。

「ところでさ、前から気になってただけど、お前のその下敷き」
そう言って、彼は俺のノートを指差す。下敷きに使っているのは硬質クリアファイル。その中に納められているのは、卒業式の日には皆で撮った写真……なのだが、配布担当の香苗がとんでもないことをしでかしてくれていた。

俺と佳織ちゃんをハートマークで囲んでなにやらわけのわからんことを書き込んでいるのだ。

「あ、ああ……これが何かしたか？」

「……その子、彼女？」

「凶星。」

「……バレた？」

「フーか、バレバレ。こないだ駅でその子とお前が手つないで歩いてるの、見たぜ？」

ニヤリとされる。うう、こうなるとぐうの音も出ない。

結局俺は、1年前と同様に、佳織ちゃんとの馴れ初めを話すことになってしまったのだった。

その日の放課後、部活が休みということで俺は駅からダッシュで白鷺台中に向かっていた。そこには俺を待っているひとがいるから。

「よお、久しぶり！」

生徒会室のドアをノックして、会議をしていないことを確認すると、俺は懐かしいそのドアを開ける。

「あ、先輩、お久しぶりです！」

生徒会役員たちが笑顔で俺を迎えてくれた。

「ほら佳織ちゃん、行ってきなよ！」

佳織ちゃんの隣に座っていた女子生徒（新しい会計の子だ）が佳織ちゃんの肩を小突くと、ふらりと佳織ちゃんが前につんのめる。

慌てて佳織ちゃんを受け止めに行くと、佳織ちゃんは見事に俺の腕の中にすっばりと入り、なぜか生徒会室では拍手が巻き起こった。

……やれやれ。しかし、今年の生徒会メンバーも楽しそうじゃないか。

そう思うと、自然と笑みがこぼれる俺なのだった。

side: Masahiro Fin

卒業式は先代生徒会役員メンバー全員の視点から描きます。

今回は高専に進学した元生徒会長のお話。

結局佳織ちゃんとはラブラブになったようです。よかったね。

今回は元副会長の春樹視点からです。お楽しみに。

卒業式が行われたのは3月中旬、すなわち県立高校の合格発表翌日だった。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとうございます。特に先輩方には……」

在校生の送辞はナツツン。今では誰もが認める生徒会長だ。俺も応援弁士をやったかいるがあるってもんだ。

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」

見事なまでに送辞を締めくくると、ナツツンは壇を降りて自分の席に戻っていった。次はマー坊の最後の仕事。「答辞」。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」

卒業生代表で壇上に立つマー坊を見て、「3年間生徒会役員として一緒にやってきたけど、これでもう、本当に最後なんだな」と感傷的になってしまう。ふと、壇上のマー坊と目が合った、ような気がした。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございました。以上をもって、答辞とさせていただきます。卒業生代表、穂積雅弘」

最後の校歌斉唱。隣に立つアンナが一筋の涙を流すのが見えた。

卒業式も終わり、俺はアンナに見つかからないうちに、そして香苗の呼び出しも無視して、3年間慣れ親しんだ学び舎をあとにしていた。あの時と同じ桜並木が俺の視界を桃色に染め上げていた。綺麗だな……と、柄にもなく思う。

俺は、卒業式でのアンナの涙を見た瞬間決めていたのだ。

アンナに会わないうちにこの学校を去ろう、と。でない俺がつ

らくてたまらなくなってしまうから。自分勝手だと思われてもいい。それにアンナも俺の姿を見つけたら……

「ハル！あんたっいたらまだやらなきゃいけないことがあるんじゃないの？」

香苗の怒声に振り向くと……今一番会ってはいけない人物と、目が合った。その瞳には涙をいっぱいに湛えている。ああ、そういうことか……。俺は納得し、頷くと乾いた笑いを漏らしてしまった。

「はは……辛くなるから早めに帰ろうと思ってたのにな。当の本人と香苗に捕まっちゃった」

「ハルちゃん、それってどういう……」

アンナの震えた声に、無慈悲にも思える言葉を返す。そう、これが俺の選んだ道なのだから……。

「わかってんだろ？お前は白鷺台を離れる。俺は白鷺台に残る。この違いがどんなものなのか」

すると、香苗がずかずかと俺に近づき、バチン、と景気よく平手打ちをかましてくれた。

「香苗！」

香苗を止めようと必死にすぎるアンナなど気にも留めたふうでない。

「ハル、あんたそれはアンナから逃げてるだけだよ。アンナの事好きだって言ったくせに……あたし……あたしは……」

めったに泣かないあの香苗が、俺とアンナのために、歯を食いしばってまで、泣いていた。

「あたしは何のためにあんたたちの相談に乗ってたのさ！」

「あ……」

俺は、なにを考えていたんだろう、なんて自分勝手に物事を進め

てしまおうとしたのだろう。罪悪感が心を支配する中、香苗とアンナを交互に見やる。

「あたしは記念写真の準備してるからさ、あとは二人でなんとかしなさいな用事が終わるまであたしはあつちで待ってるから」

香苗が俺たちから少し離れた位置に陣取る。気を遣ってくれてい
るんだろう。

だったら、言わなきゃな。

俺は重い口を開く。

「ごめん、俺、お前から逃げた。哀しい思いをするのが怖かった。でも違うんだよな。メールも電話もできるし長期の休みにはこっちに帰ってこられるもんな」

「そうだよ……遠いけど、ちゃんと繋がってるんだよ」

何度目かのアンナの涙。それを拭うこともせず、アンナは俺の胸の中に飛び込んできた。刹那、心臓がドクンと跳ね上がった気がした。いや、気のせいじゃない。これは……。

「好きだよ……好き……ハルちゃん」

その言葉にふわふわとした心地よさを感じ、でも無性に切なさを覚え、俺の視界もかすんでいく。それが涙だというのは、誰の目に見ても一瞬でわかるものだった。

「俺も。最後の最後まで素直になれなくてごめんな」

やがて、

「もういい？」

香苗がごほん咳払いをし、そう言葉を発したものだから、慌てて俺たちは身体を離す。

「じゃあ、記念撮影いっきまーす！」

用意してきたカメラを構え、香苗がひときわ明るい声でシャッターを押した。

「さあて、今度は生徒会の写真も撮らなくちゃね。ほら、おいで二人とも！皆待つてるよ！」

走り出す香苗のあとを追って、俺とアンナもすっかり手を握りあって走る。もちろん、アンナへの配慮は忘れたりなんかしない。

やがてマー坊と佳織ちゃんもやってきて、生徒玄関前のひときわ大きな桜の下に新旧の生徒会メンバーと顧問が集まる。

「よし役者は揃ったね。じゃあ写真撮るよー！」

香苗がタイマーをセットし、急いで列に戻る。

そして、生徒会役員たちが一枚の写真に納まった。

だがしかし、俺には別れを告げなければいけない人物がもう一人いた。

「なあ、コウ」

謝恩会を終えた俺たちは陸上競技場にいた。3年間ここで鍛錬を重ね、数々の大会に挑んだ記憶。俺は短距離や障害走、コウは長距離とジャンルは違えど、ずっと一緒だった。そう、小学生の頃、いや、もっと前から俺たちはいつも一緒だった。

「どうした？」

「いや……お前、いつここ発つのか？」

「いつって……4月1日だけだ」

4月1日。まだ時間はあるが、準備やら何やらでコウは忙しいところの上ないだろう。

「そっか、しばらくお別れだな。なんか変だよな、俺たち小さい頃から一緒にいるってのに」

苦笑する俺に、コウも苦笑してみせた。

「馬鹿、いつまでも一緒ってわけにはいかないだろう？いつか離れるときは来るんだ……といっても、夏休みの練習が終われば帰ってこられるけどな」

「過酷なんだろう？」

スカウトが来たとき、その練習メニューを先輩から聞いて気絶しそうになったっけ。

「らしいな。僕が向こうについた翌日から練習だって聞いている」

「そつか。頑張れよ」

「わかつてる」

しばしの沈黙。話すことが何もなくなってしまうた。

「なあ、ハル」

その沈黙を打ち砕いたのはコウだった。

「なんだ？」

「お前、夢とかあるか？将来のビジョン、っていうのかな」

こいつは答えに困る質問をいつも唐突に投げかけてくる。もうすぐしばしの別れだというのにそういうところはいつも通りだ。

「入ってから考える。総合学科ってそういうもんだろ？」

「そつか……じゃあ、お前にだから言うけどさ」

「僕は実業団に入って一流の陸上選手を目指したいと思ってる。ああ、箱根駅伝にも出てみたいな」

そう続けた。

「いいじゃねえか。誰も馬鹿にする奴なんかいないと思うぜ？」

本気で言う俺に、すかさずツツコミを入れるコウ。え、なんでだよ？

「馬鹿かお前は。なんでお前にだけ言ったかわからないのか？」

「ん……？」

するとコウはニカツと笑うと、突然肩を組んできた。

「だって僕たち、ずっと友達じゃないか。離れてたって連絡は取れるし会うことだってできるじゃないか」

「ちよ、ちよつと待てよコウ。お前らしくないぞ、違う意味で」

「いいじゃないか。な？」

コウにしては珍しい満面の笑顔に、俺もつられて笑ったのであった。

高校に入ってから部活三昧ではあったが、馬の合う友人が何人もできた。しかし、女子生徒とはあまりそりが合わない。やはり、「彼女」の純真無垢なところがずっと忘れられないのだろう。

「おい、保坂。生徒手帳落としたぜ」

ギクツ。アレにはどうしても「見られたくない物」と言うか、「見られると恥ずかしいもの」というか、何より「見られると照れくさいもの」が入っているのだ。

「な……なんだよおい、ビビらせんなよ」

「ははーん、ビビってるってのはあれか？中学のときの彼女か？」

そう。俺の生徒手帳にはあの日撮った写真が入っているのだ。初めて二人で撮った写真。

「バカタレ。今も現役で彼女だったの」

「ったく、うらやましいよなーあんな可愛い彼女いるなんて」

「もう聞き飽きたよソレ」

盛大にため息をついてやる。

「へーへー、ごちそうさまです。で、彼女は夏休みに帰ってくんの？」

そつだ。もうすぐ俺の学校では夏休みが訪れようとしていた。

「夏期講習が終わったら、だと。さすが進学校だよな」

「うへえ……美人な上成績優秀って言うことねえだろ」

そんな友人のことはほつといて、写真にもう一度目を落とす。二人揃って涙目なもんだから、今となっては笑えてきてしまう。

そして、夏休みが訪れ、アンナの夏期講習が終わり……。

彼女は帰って来た。この、白鷺台に。

帰ってくる日取りはメールで聞いていたが、いざとなるとやはり緊張するものだ。俺は駅のホームに立ち、やってくる電車を待つ。

やがて、電車のドアが開いた瞬間。

「ハルちゃん、久しぶりだね」

涼やかな懐かしい声。こみ上げるものを抑え切れず、人通りの多い駅構内だということも忘れて、俺はアンナを強く、強く抱きしめた。

S
i
d
e
:
H
a
r
u
k
i

F
i
n

卒業式と後日談・元副会長の春樹編です。

今回はどうしても男同士の友情が書きたくて無理やり謝恩会のあとにねじ込みました。

それにしても香苗は誰のシナリオでも大活躍です。笑

で、その香苗が主役の side: Kanae を次回掲載する予定です。

ちなみにお気づきの方もいらっしやるかもしれませんが、

タイトルの side: (名前) っていうのは某サンホラを意識していたりします。

では、次回までまたお付き合いください。

次回はかなりの難産になるかもしれませんが……。

卒業式が行われたのは3月中旬。県立高校の合格発表翌日。生徒会メンバーは全員合格してくれて、あたしは万感の思いで卒業式に臨んでいた。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとございます。特に先輩方には……」

在校生の送辞はナツツン。生徒会長就任の挨拶のときはあんなに緊張していたのに、今はすっかりと送辞を読み上げていく。なるほど、誰もが認める生徒会長になったってもの。

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」
完璧に送辞を締めくくると、ナツツンは壇を降りて自分の席に戻った。次は雅弘の最後の仕事。「答辞」。あたしはぜひつたいにコシを見届けねばならない。そう思い、壇上に立つ雅弘を見つめていた。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」
卒業生代表で壇上に立つ雅弘を見て、初めて出会った日のことから今までのことを回想する。母親同士が友達で、赤ちゃんの頃からずっと一緒に、小学校のときもあたしが思春期を迎えるまでは一緒に遊んでいた。一時期は疎遠になってしまったけど、それが恋だというのには一心に遠藤先生を慕うアンナと出会ってからわかった。たまたま「生徒会入らない？」と雅弘を誘い、一緒に生徒会役員選挙に臨んで、そして過ごした生徒会での日常。壇上の雅弘と目が合った瞬間、あたしはこぼれそうになる涙を必死に堪えた。あいつにだけは泣いてるあたしを見られたくない。そんな変なプライドは最後まで捨てることはできなかった。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございました」

ございました。以上をもって、答辞とさせていただきます。卒業生代表、穂積雅弘」

卒業式が終わった直後、あたしは遠藤先生と手塚先生に呼び出されていた。何が起こったのか最初はよく分からなかったけど、

「つまり、最後に新旧生徒会役員と一緒に写真を撮らないか、ということだ」

その手塚先生の言葉と、遠藤先生が持っているデジタル一眼レフカメラを見て納得した。既にほかの生徒会メンバーには伝えてあるとのことで、あとはそのときを待つだけ。

ただ、雅弘とハルが、時間になっても来ない。雅弘はなんかその辺で佳織ちゃんをなぐさめているようだったけど、ハルがどこを探してもいない。

まさか。

「アンナ、行くよ!」

「え、行くよって……きゃっ!」

「アンナだってハルに言いたいことあるでしょう!」

無理やりにアンナの手を引いて、あたしは走り出した。

「ハルの奴……許さないんだからね」

そう呟きながら。

しばらく走ったところで、ハルを見つけた。あいつ、約束破って一人で帰ろうとしてる……!

「ハル! あんたったらまだやらなきゃいけないことがあるんじゃないの?」

遠慮なく怒鳴りつけてやる。横ではアンナが瞳に涙をいっぱい

ためてうつむいていた。そんなあたしたちなど意にも介さぬ風に、ハルは乾いた笑いを漏らす。

「はは……辛くなるから早めに帰ろうと思ってたのにな。当の本人と香苗に捕まっちゃった」

「ハルちゃん、それってどういう……」

アンナの震えた声に、あいつはものすごく冷たい言葉を投げかけた。

「わかってんだろ？お前は白鷺台を離れる。俺は白鷺台に残る。この違いがどんなものなのか」

勝手なことと言って。許さない。アンナを傷つけるなんて、アンナから逃げるなんて、絶対に許さない。

あたしは涙を必死に堪え、ハルに歩み寄るとその頬を景気よくはたいてやった。

「香苗！」

あたしを止めようと必死にすぎるアンナ。でも、あたしには言わなきゃいけないことがある。

「ハル、あんたそれはアンナから逃げてるだけだよ。アンナの好きだって言ったくせに……あたし……あたしは……」

もう、我慢できなかつた。勝手に涙があとからあとからこぼれて、自分ではどうにもできない。

「あたしは何のためにあんたたちの相談に乗ってたのさ！」

全身を使っつて、あたしは思いのたけをハルにぶつけた。

「あ……」

何かに気づいたかのように、ハルはあたしとアンナを交互に見やる。あとは二人でなんとかするべきだ。これ以上あたしが口を出すことではない。

「あたしは記念写真の準備してるからさ、あとは二人でなんとかしなさいな。用事が終わるまであたしはあっちで待ってるから」

そう言つて二人とは少し離れた位置に陣取る。なにやらぶつぶつと話し声が聞こえるが、聞いてるとこつちまで恥ずかしくなりそうだったから聞かない振りをしておく。

やがて、

「もういい？」

あんまりにも恥ずかしい言葉の羅列に、思わずごほんと咳払いをし、その言葉を発した。ついでにちよつとやってやろうじゃないの。遠藤先生や手塚先生もこれぐらいなら許してくれるよね。

「じゃあ、記念撮影いつきまーす！」

あたしは用意してきたカメラを構え、ひときわ明るい声でシャッターを押した。半泣きの表情で腕を組んだ二人が一枚の写真に納まる。

「さあて、今度は生徒会の写真も撮らなくちゃね。ほら、おいで二人とも！皆待つてるよ！」

そう言つて、あたしは先に走り出す。ふと振り向くと、ハルはしっかりとアンナの手を握つてあたしを追いかけてきていた。

やがて雅弘と佳織ちゃんもやってきて、生徒玄関前のひときわ大きな桜の下に新旧の生徒会メンバーと顧問が集まる。

「よし役者は揃つたね。じゃあ写真撮るよー！」

デジタルカメラのタイマーをセットして、急いで列に戻る。

そして、新旧の生徒会役員たちが一枚の写真に納まった。

「さて、あとはコウとアンナか……」

白鷺台駅の改札口前には、コウとアンナを除いた旧生徒会メンバーが集まっていた。夏期講習を昨日終えたナツツンと萌美ちゃんもいる。

「コウ先輩もアンナ先輩も、出発する日が同じなら帰ってくる日も一緒っスね」

「そりゃそうだろ。あいつら盆と正月しか休みないらしいぜ」

雅弘は実にのんびりとナツツンに答える。高専のバレエ部の練習

は中学のときほどきつくはないらしい。あたしが通ってる高校もそうだけだ。

一方のアンナは夏休みも夏期講習という名目で授業が行われたり、コウはひたすら陸上部の厳しい練習に耐えて頑張っているという。ちなみにどっちもハル情報。一応二人ともメールできる程度の余裕はあるようだ。

やがて階段からたくさんの人が降りてくる。電車が来たみたいだ。たくさんの人の中からコウとアンナを見つけるのは難しいことじゃなかった。アンナはあの金髪を下ろして、そしてコウはアンナと言葉を交わしながら階段を下りてきているのだから。

にやり。悪戯心が働いた。

改札から出てきたコウにハルがなにやら声をかけている。おろおろしているアンナの背後に回ると、

「おいハル、大事なことを忘れてるぞー！」

そう言っつて、相変わらずおろおろしているアンナの肩をぽんと押してやる。

「え？……っつと。ったく、あぶねーなー」

ふらついたアンナを見事にハルが支えてやる。ハルの胸の中できよよんとするアンナ。ハルは高校に入って更に身長が伸びたらしくて、アンナがなおのこと華奢に見える。

「ホントいつ見てもお似合いだよな、二人とも」

少し日焼けしたコウも腕を組んでニヤニヤしている。

「な、なんだよお前ら」

「感動の再会をプロデュースしたまでよ、ねえみんな」
あたしの言葉にみんなが頷く。

「ったくよー。そう言っつてからかいたいただけだろうが」
とか言いつつ、なにげにハルはアンナを離そうとはしない。

「よーし、じゃあ積もる話はそのカフェで！」

中学のときにアンナとよく通ったカフェを指差して、あたしは皆より1歩だけ前を歩いた。

そこで今更ながら気づいたことがひとつあった。
春って、別れの季節じゃなくて、はじまりの季節なんだな。
と。

side : Kanae fin

卒業式と後日談、元副会長香苗編です。

幼馴染で思い人でもある雅弘との二度目の別れ。

でも再会はきちんと果たせました。春は別れの季節、でも始まりの季節。

ちなみに春樹編とは杏奈と春樹の再会シーンが違いますが、

ifストーリーと解釈してください（無理やり）

今回は元議長・浩一編です。

卒業式が行われたのは3月中旬。生徒会室が喜びに沸き立った県立高校の合格発表翌日だった。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとうございます。特に先輩方には……」

在校生の送辞は例年通り現生徒会長のナツツンが勤めることになっていた。就任の挨拶のときは物凄く緊張していたというのに、この変わりようだ。今では誰もが認める生徒会長といってもいいだろう。

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」
しっかりと送辞を締めくくると、ナツツンは壇を降りて自分の席に戻っていった。次は元生徒会長たるマー坊の最後の仕事、「答辞」。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」
卒業生代表で壇上に立つマー坊を見て、初めて生徒会で一緒になつて会話したときのことや、マー坊の生徒会長当選を皆で祝った日のこと、そしてこの1年間のことを思い出し、なんだか感傷的になつてしまう。壇上のマー坊と目が合う。僕はしっかりとマー坊に微笑み返した。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございました。以上をもって、答辞とさせていただきます。卒業生代表、穂積雅弘」

最後の校歌斉唱ではやはりこみ上げてくるものがあつたが、僕はそれを抑え込んで、しっかりと歌い上げた。

卒業式が終わった後に香苗からメールが入った。

「下校前に生徒玄関前の桜の木の下に集合！皆で写真撮るよ！」

いかにも香苗らしい文面、そして内容である。あいつのやりたいことなんて僕にでもわかる。要するに集合写真の一枚でも撮っておこうということなんだろう。

最後のホームルームが終わり、例の桜の木の下に顔を出すと、ハルとマー坊以外の新旧生徒会役員、そして遠藤先生と手塚先生の姿があった。マー坊とハルはどこに行ったんだ？

とりあえずマー坊は発見できた。目の前で佳織ちゃんとなにやらもめている、ように見えるが単にいちやついてるだけだった。こいつら……。しかしハルの姿はどこを探してもない。

突然香苗が何かに気づいたかのようにデジカメを握り締めると、

「アンナ、行くよ！」

「え、行くよって……きゃっ！」

「アンナだってハルに言いたいことあるでしょう！」

無理やりにアンナの手を引いて、香苗が走り出した。

「ハルの奴……許さないんだからね」

その呟きを、僕は聞き逃さなかった。そして僕は、ことの全てを察する。

ハルの奴、アンナに会つと自分がつらいからつて逃げようとしたな。

やがてマー坊と佳織ちゃん、息せき切つて走ってきた香苗とハル、アンナもやってきて、生徒玄関前のひときわ大きな桜の下に新旧の生徒会メンバーと顧問が集まる。

「よし役者は揃つたね。じゃあ写真撮るよー！」

香苗がタイマーをセットし、急いで列に戻る。

そして、新旧生徒会役員たちが一枚の写真に納まった。このメンバーで撮る写真は最初で最後だ。

「なあ、コウ」

謝恩会を終えたあと、僕たちは陸上競技場に戻ってきていた。 3

年間ここで練習を重ね、数々の大会に挑んだ記憶。僕は長距離、ハルは短距離と競技にこそ違いはあったが、いつだつてずっと一緒だった。親同士が仲良しだったこともあり、僕とハルは昔からずっとずっと一緒だった。

けど、それももう少して終わりになつてしまふ。

「どうした？」

ハルの問いかけに答える。もう西陽が差し込んでくるような時間だ。陸上競技場は夕暮れの朱に染められていた。

「いや……お前、いつここ発つのか？」

「いつつて……4月1日だけだ」

4月1日。まだ時間はあるが、色々準備が要るので誰かに会ったりすることは到底不可能だろう。自主トレに課題、そして身の回りの準備。

「そっか、しばらくお別れだな。なんか変だよな、俺たち小さい頃から一緒にいるつてのに」

ハルの苦笑につられて僕まで苦笑してしまふ。

「馬鹿、いつまでも一緒つてわけにはいかないだろ？いつか離れるときは来るんだ……」といつても、夏休みの練習が終われば帰つてこられるけどな」

「過酷なんだろ？」

先輩から練習メニューを聞いて驚愕した覚えがある。中学の練習量なんてたいしたことなどないようなハードなメニューだった。

「らしいな。僕が向こうについた翌日から練習だつて聞いている」

「そっか。頑張れよ」

「わかつてる」

そこで一瞬の空白。僕はそれを切り裂くように、ハルに問いを投げかけた。

「なあ、ハル」

「なんだ？」

「お前、夢とかあるか？将来のビジョン、つていうのかな」

僕には確固たる答えがあるこの質問。ハルは少し困った様子で、いかにもハルらしく答える。

「入ってから考える。総合学科ってそういうもんだろ？」

その言葉を聞いて、僕も決心した。「夢」「将来のビジョン」を、こいつにだけは話しておこう、と。

「そうか……じゃあ、お前にだから言うけどさ」

一旦言葉を切る、少し照れくさかったから。

「僕は実業団に入って一流の陸上選手を目指したいと思ってる。ああ、箱根駅伝にも出てみたいな」

陸上競技場に目をやりながら、確固たる口調で言い切った。

「いいじゃねえか。誰も馬鹿にする奴なんかいないと思うぜ？」

そりゃそうかもしれない。でも、ハルにだけ話したのには理由があるんだ。

「馬鹿かお前は。なんでお前にだけ言ったかわからないのか？」

なんだか笑いさえこみ上げてくる。ハルに抱いている特別な感情。マァ坊たちへの思いとは違う何か。それがなんなのか、今やっと判った気がした。

「ん……？」

僕は僕らしくもないことにニカツと笑い、驚いた様子のハルと肩を組む。

「だって僕たち、ずっと友達じゃないか。離れてたって連絡は取れるし会うことだってできるじゃないか」

そう。ただの友達、じゃない。こいつはずっと僕の「親友」なんだ。

「ちょ、ちょっと待てよコウ。お前らしくないぞ、違う意味で」

「いいじゃないか。な？」

それが、ハルとの一旦の別れだった。

「あれ、コウくん」

白鷺台に帰るために乗った電車の中。聞いたことのある声に振り

向くと、そこにいたのは長い金髪を下ろした青い瞳の女の子だった。

「……アンナ」

「久しぶりだね。卒業式以来かな」

言っと、アンナは僕の隣の座席に腰をかける。

「お互い変わったな」

「そうかなあ」

髪を下ろすだけで女の子ってこんなにも印象が変わるんだな、とアンナを見ていて思う。かく言う僕も連日の容赦ない練習ですっかり日焼けしてしまったし、中学のときより少し身長も伸びた。

「確かにコウ君はちよつと変わったかもね。なんか、精悍になったって言うか」

難しい単語を使っているあたりアンナらしい。

「アンナも前より女の子っぽくなった気がする……いや、前からだけどさ」

言っていてなんだか照れくさくなった。

「間もなくー、白鷺台、白鷺台です、お出口は右側になります……」
もう時間か。僕とアンナは同時に立ち上がり、ドアが開くのを待つ。

「お、来た来た、待ってたぜ！」

改札から出て来るなり僕にハルが声をかけてきた。一方おろおろしているアンナの背後に回る香苗。これは……来るな、香苗の悪戯が。

「おーいハル、大事なこと忘れてるぞー！」

そう言っつて、相変わらずおろおろしているアンナの肩をぽんと押してやる。

「え？……つと。つたく、あぶねーなー」

ふらついたアンナを見事にハルが支えてやる。ハルの胸の中心できよんとするアンナ。もともと僕より身長が高かったハルだが、高校に入って更に身長が伸びたらしく、アンナがなおのこと華奢に見

える。

「ホントいつ見てもお似合いだよな、二人とも」

思わず腕を組んでニヤニヤしてしまう。それほどまでにこいつらはお似合いのカップルだ。

「な、なんだよお前ら」

「感動の再会をプロデュースしたまでよ、ねえみんな」

香苗の言葉にみんなが頷く。

「ったくよー。そう言ってからかいたいただけだろうが」

とか言いつつ、ハルはアンナを離そうとはしない。ったく、見せ付けてくれやがって。

「よーし、じゃあ積もる話はそのカフェで！」

中学のときにアンナと香苗がよく通ったカフェを指差して、彼女は皆より1歩だけ前を歩いた。

卒業は終わりじゃなく始まり。そう呟いた香苗の言葉が僕の心に染み渡ったような、そんな気がした。

side: Kouichi fin

卒業式、元議長：浩一編です。

彼の場合は実に平和な卒業式だったようで……。

電車内でのアンナとの再会シーンはどうしても書きたかったのですよ。

次回は元書記：杏奈編です。ちなみに杏奈編にはi f ストーリーもありません。

まだまだ長いのですがお付き合いいただければ幸いです。

翌日の卒業式。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとうございます。特に先輩方には……」

在校生の送辞は夏岡君。生徒会長になってからの成長は凄まじいものがあって、今では誰もが認める生徒会長だ。

(夏岡君、頑張ってね)

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」

そして次は、マー君の答辞。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」
卒業生代表で壇上に立つマー君を見て、「ああ、この光景ももう見られなくなってしまうんだ」と妙に感傷的になってしまう。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございました。卒業生代表、穂積雅弘」

そして最後の校歌斉唱。ここでついに堪えていた涙がポロリとこぼれ落ちた。

卒業式が終わったあとに、香苗からメールが入った。帰る前に生徒玄関前の桜の木の下に集合、とのことだったんだけど、ハルちゃんやんがどこを探しても、いない。マー君は泣きじゃくる佳織ちゃんを必死になくさめているようだったけど、ハルちゃんの姿だけがどこにもない。

「アンナ、行くよ!」

不意に何かに気づいたように、香苗があたしの手を握り走り出す。

「え、行くよって……きゃっ!」

「アンナだってハルに言いたいことあるでしょう!」

それは、そうだけど……。

「ハルの奴……許さないんだからね」

香苗がそう呟くのが聞こえた。

卒業生が続々と帰る中、あたしは香苗と一緒に桜並木の中を息せき切って走っていた。

香苗は片手にデジカメを持って、あたしは……ハルちゃんに伝えなきゃいけない想いを持って。

「ハル！あんたったらまだやらなきゃいけないことがあるんじゃないの？」

振り返るハルちゃんはあたしを視界におさめ、ああ、と納得したように頷いた。そして、酷く辛そうな表情で言葉を紡いだした。

「はは……辛くなるから早めに帰ろうと思ってたのにな。当の本人と香苗に捕まっちゃった」

「ハルちゃん、それってどういう……」

どうしてわかってくれないんだろう、どうしてあたしからいつも逃げようとするんだろう、このひとは。そう思うと涙がぶわっとあふれ出してくる。

「わかってんだろ？お前は白鷺台を離れる。俺は白鷺台に残る。この違いがどんなものなのか」

すると、香苗がハルちゃんにずかずかと歩み寄り、そのほっぺを勢いよくはたいた。

「香苗！」

必死で香苗にすがって止めようとするけど、もう香苗を止めることはできない。

「ハル、あんたそれは逃げでしかないよ。アンナの事好きだって言ったくせに……あたし……あたしは……」

めったに泣かないあの香苗が、あたしとハルちゃんのために、泣いている。

「あたしは何のためにあんたたちの相談に乗ってたのさ！」

「あ……」

ハルちゃんは何か気付いたように、香苗とあたしを交互に見やる。

「あたしは記念写真撮りに来ただけだから、あとは二人でなんとかしなさいな、用事が終わるまであたしはあっちで待ってるからさ」
香苗があたしたちから少し離れた位置に陣取ると、ハルちゃんは重い口を開いた。

「ごめん、俺、お前から逃げてた。哀しい思いをするのが怖かった。でも違うんだよな。メールも電話もできるし長期の休みにはこっちに帰ってこられるもんな」

あたしはゆっくり頷く。

「そうだよ……遠いけど、ちゃんと繋がってるんだよ」
何度目かの涙。拭うことも知らず、あたしはハルちゃんの胸の中に飛び込んでいった。

「好きだよ……好き……ハルちゃん」

「俺も。最後の最後まで素直になれなくてごめんな」

やがて、

「もっいいい？」

香苗がごほん咳払いをしてそう言葉を発したため、慌ててあたしたちは身体を離れた。

「じゃあ、記念撮影いっきまーす！」

腕を組んだあたしとハルちゃんに向かって、香苗がひときわ明るい声でシャッターを押した。

「さあて、今度は生徒会の写真も撮らなくちゃね。ほら、おいで二人とも！皆待ってるよ！」

そう言って、先に走り出す香苗。そしてあたしに向かって手を差

し出すハルちゃん。大きく頷くと、あたしはその手をとって、二人で香苗の後を追う様に走った。

やがてマー君と佳織ちゃんもやってきて、生徒玄関前のひとときわ大きな桜の下に新旧の生徒会メンバーと顧問が集まった。

「よし役者は揃ったね。じゃあ写真撮るよー！」

デジタルカメラのタイマーをセットして、香苗が急いで列に戻る。そして、新旧の生徒会役員たちが一枚の写真に納まった。

あたしと香苗は、卒業式が終わった後も何だか名残惜しくて野球部のグラウンドのギャラリィ席にいた。

ここはあたしの思い出の場所。香苗にはよく部活が終わるまでここで待つてもらってた。突然の風に、桜の花びらが舞い散る。

「そっか…… 4月1日なんてネタだと思ってたけど、本当だったんだね」

4月1日、あたしは白鷺台を発ち、新しい環境へと向かう。うまく行くかどうかは分からないけど、やらなきゃわからない、ってあたしの肩を押してくれたのも香苗だった。

「あはは、エイプリルフールだからって誰も信じてくれないの」

あたしは泣いていた。声は笑ってるけど泣いていた。散々あたしに振り回されながらも親友でいてくれた、そばにいてくれた香苗との別れが哀しくて。

「アンナ…… あんた泣いてるでしょ」

「ばれちゃった？」

「バレるに決まってるでしょ。あんたのことならなんでもお見通しなんだか……ら……」

香苗の言葉の語尾が掠れていく。また風が吹き、桜の雨が降る。

あたしたちの頬を伝った涙に桜の花びらがくつついた。

「香苗…… 香苗まで泣くことなんか、ないよ。また会えるもん。絶対会えるよ」

結局あたしたちは、謝恩会にギリギリ間に合う時間までそうしていた。

そして高校生活が始まった。新しい環境でも友達はできたけれど、香苗ほど腹を割って話せる相手はなかなかいなかった。皆うわべだけの付き合い。勉強においては全員がライバル。

中間ではどうにかベスト3に食い込むことができたけれど、中学とはあまりに違いすぎる環境に少ししんどくなってきた。そんなときにメールを送ってくれたのが香苗だ。

「今週末そっち行きたいんだけど、大丈夫？」

今週末は空いている。テスト期間も終わったばかりだし。

「うん、こっちは来なよ。いろいろ話したいことあるし」

週末がやってきた。駅に香苗を迎えに行くと、もう香苗は1本前の電車で来てたようだった。

「ごめん、待たせちゃったね」

「大丈夫、この町がどんな感じか少し見たかったから」

白鷺台よりもずっとずっと大きな町。いわゆる「県庁所在地」ってやつだ。

「久しぶりだね、引越しのとき以来？」

「そうそう。ところで新しい友達とかできた？」

絶対来ると思っていた質問。口が重いけど、答えなければいけない。香苗には尚更正直に。

「うん……できた、って言えばできたけど、なんだか表だけの付き合いって感じ。勉強のことになると全員がライバルだし」

「まあ仕方ないよ。進学校なんてそんなもんだよ。うちの学校もそうだし。修学旅行すらないんだよ？」

「うちの学校は研修旅行っていうのがあるけど、実質修学旅行とあんまり変わらないや」

そんな感じで近況を話していたらあつという間に時間は過ぎて、香苗も帰る時間になってしまった。

「じゃあ、またね」

「うん、また」

あたしたちには「さよなら」の言葉は必要ない。今も、これからも、ずっと。

下宿先にはコルクボードを用意して行った。中学の思い出の写真や学校関係のメモを貼り付けている。

その中には、あたしとハルちゃんの二人でとった写真があった。ハルちゃんとの付き合いはまだ続いていて、白鷺台に帰ると必ず会うようにしている。っていうか、生徒会OBORG会みたいなものが勝手に結成されて、それで会うことも多いんだけどね。

憧れでしかなかった遠藤先生への小さな恋。生徒会での3年間。

ハルちゃんとの恋。

全てが忘れえない素敵な思い出。

あたしは、白鷺台中学校の生徒会役員になれて、白鷺台中学校に通えて幸せでした。

s i d e : A n n a f i n

卒業式杏奈編（ノーマル版）です。

遠藤先生への思いをどうにか消化できたようで、

春樹や香苗とも仲良くやっっているようですね。

女の子同士の友情もいいものです。

同時に杏奈視点卒業式アナザーストーリーもUPしました。

こっちは遠藤先生への思いを捨てきれなかった杏奈のお話になります。

翌日の卒業式。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとうございます。特に先輩方には……」

在校生の送辞は夏岡君。生徒会長になってからの成長は凄まじいものがあって、今では誰もが認める生徒会長だ。

(夏岡君、頑張ってね)

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」
そして次は、マー君の答辞。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」
卒業生代表で壇上に立つマー君を見て、「ああ、この光景ももう見られなくなってしまうんだ」と妙に感傷的になってしまう。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございました。卒業生代表、穂積雅弘」

そして最後の校歌斉唱。ここでついに堪えていた涙がポロリとこぼれ落ちた。

会いに行かなきゃ。これが最後でいいから会いに行かなきゃ。

あたしは息せき切って、もと来た桜並木の道を走り抜けていた。

「だから、ってちょっと、アンナ！」

一度は帰宅しようと思苗とともに歩いてきたあたしだけ、どうしても忘れられないこと、やり遂げなければいけないことを思い出した。香苗に話したら当然のように反対されたけど、その制止を振り切って、学校まで走って戻る。

生徒玄関にダッシュで駆け込むと、運良く廊下には「そのひと」がいた。

「杏奈……？どうした、忘れ物か？」

先生のとぼけたような質問にあたしは本気で言葉を返す。もうその手には乗るものか。

「……はい、大事な忘れ物をしました」

「杏奈らしくないな。卒業アルバムか？それとも卒業証書……」

「違います。先生のことです」

あたしの言葉にあっけにとられたような表情を見せていた先生だけど、やがてゆっくりと息を吐き出し、答えた。

「まだそのことを気にしていたのか。俺は……」

「3年間ずっと思いつけてきたんです。もう今更諦めなんてつきません。諦めようとしたけど無理でした、どれだけ、がんばっても……」

だんだん涙声になってくる。卒業式で涙は出し尽くしたはずなのに。

自分はどうしようもない駄々っ子だと思う。こうして遠藤先生を困らせているのだから。

でも、遠藤先生は存外にあたしに優しく接してくれた。

「どれだけ頑張っても、先生のが好きっていう気持ちは……曲げられませんから」

やがて、先生の長いため息。

「仕方ないな……誰にも言わないか？」

「はい」

何が言いたいのか。あたしにはまだわかりかねた。

「じゃあ、」

そこで声のトーンを3つぐらい落として、言葉が続ける先生。

「海に行こう。今の時期なら人は少ないし街中は目立つからな」

それはあたしにとって、とても意外な言葉だった。先生の口からそういう言葉を聞けるなんて思わなかったから。

「出発はいつだ？」

「4月1日です」

「それなら早いほうがいいな。明日は卒業式の代休だから時間は取れるぞ」

かくして、あたしと遠藤先生のデートの日取りが決まった。

帰ってからは明日着ていく服の品定め。どうしよう、こんなにわくわくしたのは初めてかもしれない。大好きな人と初めてのデート。こんなに嬉しいことなんてない。

翌日。

あたしは遠藤先生の車の助手席に乗っていた。めいっばいかわい衣服を探した結果出てきたワンピースを着て。

「そういえばこうやってまともに私服を見たのは初めてかもしれないな」

「はい。合宿中は制服かパジャマでしたから」

あたしが笑うと、先生もつられて笑う。これがあたしの望んだ「セカイ」なんだ。何も考えないで、奥さんのことも考えないで、遠藤先生と恋人みたいに接することができる、そんな「セカイ」。

その「セカイ」を構築したことに、あたしは後悔していなかった。

「似合ってるぞ」

「……え」

その言葉がうれしくて、わざと聞いてない振りをする。

「照れくさいから何度も言わせるな。その……服、似合ってるぞ。髪を下ろしてるのも珍しくていいじゃないか」

そう。きょうのためにいつもは三つ編みにまとめている髪を解いてきたんだ。この特別な日に、いつもと違うあたしを見て欲しくて。

車を降りると、春風があたしの髪をそよがせる。同時にスカート

のすそがふわりとめくれあがった。慌ててスカートを押さえ、遠藤先生を見やる。

「きゃっ」

「大丈夫か？」

うなずいて、あたしは遠藤先生の差し伸べてくれた手を握る。初めて触れる遠藤先生の手は少し冷たくて、自分の手の熱が気になったほどだった。サンダルに砂が入るのが気になって、あたしはサンダルを片手に、もう片方の手は遠藤先生に預けてそっと歩く。

「こんなきれいな砂浜が近くにあったんですね」

「ああ。石や貝殻で足を怪我することもない。存分に楽しもうじゃないか」

笑顔であたしの一歩手前を先生が歩く。一方のあたしは初めてのことだらけで、何かにつけて戸惑ってしまふ。

「といっても、何をすればいいか……」

「じゃあとりあえず話でもするか」

遠藤先生は堤防の上であぐらをかいて座っている。あたしもその横に並んで、でも脚は堤防の下にたらし座る。

そして、いろいろな話をした。3年間の学校生活のこと、これからのあたしたち生徒会メンバーのこと。

「6年前だったな。赴任してから毎年生徒会の顧問はしているが、お前たちほど仲のよかった役員はいなかったぞ」

まあ、その裏ではいろいろあったんですけどね……（色恋沙汰的な意味で）。

「ほかの奴らと離れ離れになるのは、つらいか？」

先生の問いに、あたしは笑顔で答えた。一陣の風があたしの長い髪をなびかせていったから、遠藤先生の表情は見えない。

「さびしくありませんよ。また会えるのは絶対わかっているから」

「杏奈らしいな。だからこそ、お前に話しておかなければいけないことがあるんだ」

先生の微笑が、困ったようなものに変えられる。

「え……？」

春の海はまだ寒い。でもそれとはまた違うゾクリとした悪寒が背中を流れていった。

これは、絶対に、何かが、ある。

「俺はな、4月から公立の高校で教師をすることになった。白鷺台からだいぶ離れた田舎の学校でな」

唇がわなわなと震えて、あたしは次の言葉をなかなか出せなかった。

「それって、つまり……」

「ああ。多分もう会えないだろうな。だから、最後ぐらいはお前の望みを叶えてやりたかった」

それはあまりにも残酷すぎる言葉で。

「そんな……！あたし、また遠藤先生に会えるって、あの学校に行けば会えるって思ってた……！」

敬語なんて使ってる余裕はなかった。ただ先生に泣いてすぎるしかなかった。

先生はそんなあたしの髪をなで、くいとあたしの顎を持ち上げた。何が始まるのか一瞬わからなかった。

でもすぐにそれを察して、目を閉じる。同時に、ほんの一瞬だけ唇に何かやわらかいものが触れる。

先生との、最初で最後の、キス。

「先生、ずるいですよ……こんな苦い思い出残して行っちゃうなんて」

あたしの好きな歌手が出した曲の中で「最初で最後のキスは甘くて苦かった」なんて歌詞が入った歌があったっけ。

今はまさにそんな気分だ。

「悪かった」

あたしの体に腕を回そうとする先生に、あたしは必死で抵抗した。もうそれ以上変な憐憫の態度を投げかけられたくなかった。そんなにあたしの気持ちは軽いものじゃない。3年間積み重ねた気持ちの重さ。それが今、先生の手を容易に振り解くまでに爆発している。「あたしのこと好きでもなくせに、そんなことしないでください！」

「……悪かった。杏奈の気持ちを汲み取ってやりたかったんだが、逆効果だったみたいだったな」

そして、夕空の下。遠藤先生はいつになく悲しそうな表情で、

「帰ろう。ご両親が心配するぞ」

そう言った。

そしてそれからあたしと遠藤先生の縁はぶつりと途絶えてしまった。あたしと遠藤先生は二度と会うことがなくなってしまったのだから。

訃報を聞いたのは、あたしが高校2年になるころだった。

公立の高校で教師をするなんて嘘で、実際には癌で入院して闘病していたこと。あたしだけじゃない、生徒会のメンバーもそれを知らされてはいなかった。ただ、ハルちゃんだけは何か思わせぶりなことを聞いたらしいけど、こんなことになるとは思いもしなかったらしい。

それぞれ違った制服に身を包んだ、生徒会メンバーとの悲しい再会。

きっと先生は、あのおときにはすでに自分の死期を悟っていたんだろう。だからあんなことをしたんだろう。

もはや涙さえ出ることのなかった通夜と告別式を終え、あたしは

高校2年になった。

それからあたしは物思いにふけることが多くなり、成績もトップクラスだったのが半分ぐらいまでに落ちてしまった。

これじゃあ遠藤先生によくない、と思っても頭の中は言うことを聞かなくて。

高校3年の夏。あたしはある決意を持って1枚の紙に向かっていった。

「何から書けばいいんだろう」

そう思案したけれど、うまい言葉は見つからなくて。

絶望、喪失感、あの日差し伸べられた手を振り払ったことへの後悔。色々な負の感情が渦となって、あたしの心を支配する。

遠藤先生のいないセカイなんて、あたしには要らない。

ついに、覚悟が決まった。

結局、

「ごめんなさい、やっぱり忘れられませんでした」

その一言だけをその紙に書いて。

翌日、あたしは立ち入り禁止になっている学校の屋上からコンクリートの地面に向かって飛び降りた。遠藤先生の後を、少しだけ遅く追う形で、あたしは先生のいなくなった空虚なセカイから消滅したんだ。

side: Anna (Another) Bad End

卒業式杏奈編のバッドエンドバージョン。

もともとゲームのシナリオで唯一のバッドエンドとして用意されていたのですが、

ゲームが日の目を見ることがなくなってしまったので小説として再構築してみました。

遠藤先生が白鷺祭の前に言っていた「あの言葉」の謎が解ける話になっています。

次回は新生徒会長、祐視点でお送りします。

「……よし、これで完成、だな。就任の挨拶のときみたいに慌てるんじゃないぞ」

「わかつてますよ、オレはもうそんなんであがりたりしませんから」
遠藤先生の言葉に思わず反論するオレ。まだまだガキ扱いされても仕方ない、のかもしれない。

11月の生徒会役員選挙で、ハル先輩とアンナ先輩のおかげもあってなんとか生徒会長になることができた。オレの彼女である萌美ちゃんも副会長になって、更にマー坊先輩と付き合い始めた浅田佳織ちゃん、そのほかやはり個性溢れるメンバーが生徒会に集結した。そうして迎えた生徒総会。オレは緊張のあまり就任の挨拶で嘔んだりコケたり散々な目にあっただけ。

でも、今のオレはそのときのオレじゃない。ちゃんと先輩たちを送るために。遠藤に渡された紙に改めて目を落とす。

うちの学校では生徒会長三大重要任務というのがあって、去年の春にマー坊先輩が務めた入学式での新入生歓迎の挨拶、生徒会役員選挙後の生徒総会での挨拶、そして、今オレが務めようとしている、卒業式での送辞。

今オレが目をやっている紙こそ、清書された送辞の紙だった。清書を担当したのは手塚先生だが、いつ見ても達筆である。

それから、授業や学年末試験の間を縫って、尚且つマー坊先輩の答辞の練習とかぶらないように、オレの送辞の練習は始まった。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとございます。特に先輩方には……」

遠藤先生と手塚先生の厳しいチェックが入る。頷きながらそれをメモ帳に書き込んでいき、送辞の練習は続く。

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」

壇を降りるまでが送辞だ。二、三度礼をして生徒会役員の席（である場所）に戻る。

「……これなら大丈夫だな」

手塚先生の言葉に、遠藤先生も頷いてみせる。

「じゃあ、本番もこの調子で頼むぞ、夏岡」

「わかりました」

一礼して、オレは講堂をあとにする。例年より早く咲き始めた桜が渡り廊下から見える。きつと、卒業式に散り始めるんだろうな……とりとめのないことを考えているうちに、生徒会室の前にとどり着いていた。

そして、3年生の生徒会メンバーが全員第一志望の高校に合格したという吉報が、オレや萌美ちゃんの耳にも届いた。

つまりそれは、卒業式を翌日に控えている、ということ。楽しかった先輩たちとの生活にも終止符が打たれるのだ。

いつもダルそうにしていながらも、決めるところはきっちり決めてくれた、頼もしいマー坊先輩。姉御肌で困ったときにはいつも頼れる存在だった香苗先輩。いつも努力するということを忘れなかった真面目なコウ先輩。気合と根性で高校受験すらも乗り越えた最強のハル先輩。1年間一緒に仕事をしてきて気配りの大切さと、痛いほどに他人を思うことを教えてくれたアンナ先輩。

そんな先輩たちとも、これでお別れだ。

翌日の卒業式。ほかのメンバーと一緒に生徒会の定位置に着席する。だが萌美ちゃんは吹奏楽部なので例外だ。後ろのギャラリイのところデチューニングをしている。

「卒業生入場」

やがて副校長の言葉と同時に吹奏楽部の演奏が始まり、在校生の間を縫うように卒業生が入場する。先輩たちが席に着き、卒業式の

始まりを告げる挨拶、理事長や来賓の挨拶と続く。

「送辞、在校生代表、夏岡祐」

「はい」

オレはもうあのときのオレじゃない。れっきとした生徒会長なんだ。しっかりとした歩みで壇上に上り、一礼して、送辞を述べ始める。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとうございます。特に先輩方には……」

実は送辞を読み上げるのが精一杯で、生徒会の先輩や文芸部の先輩の表情を知ることができなかった。まだまだオレは半人前なのかもしれない。

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」

送辞を締めくくり、一瞬だけ講堂全体を見回す。生徒会の先輩が実に満ち足りたような笑みで俺を見据えていた。

そうか。先輩は俺のことをちゃんと生徒会長として認めてくれていたんだな。遠藤先生や手塚先生もしっかりと頷いてくれた。

全てが完璧だった。オレは、やったんだ。2度目の重大な任務をしっかりとこなしたんだ。

「答辞、卒業生代表、穂積雅弘」

「はい！」

返事をして、完璧な所作で壇上に上る。……自分なりに頑張ったつもりだが、やっぱりマー坊先輩にはかなわないな、と思う。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」

マー坊先輩のような生徒会長になりたい、いや、なってやるんだ。いつかハル先輩が言っていたように、白鷺台中の柱として頑張つてやるんだ。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとう

「ごさいました。以上をもつて、答辞とさせていただきます。卒業生代表、穂積雅弘」

来年はオレの仕事だ。その頃には、どんな思いで壇上に立つのだろうか。マー坊先輩はどんな思いであの壇上に立ったのだろうか。

校歌斉唱、卒業生退場。そして生徒会役員も退場……といったところで、オレたちは遠藤先生と手塚先生に呼び止められた。

「これで先輩ともお別れだからな、是非やっておきたいことがある」
口火を切ったのは手塚先生。そして遠藤先生が携えているのはデジタル……デジタル一眼レフカメラだ。

「玄関の前に一番大きな桜の木があるだろう？あの下で新旧生徒会役員を集めて写真を撮ろう、と手塚先生と話していたんだ。卒業組には俺から香苗伝いに連絡を取ってもらうことにするよ」

「わかりました」

生徒会メンバーで撮る写真もこれが最後か……感慨深いものがある。

さて、卒業生の下校時間に合わせて例の桜の木の下に集まったオレたちだが、佳織ちゃん、マー坊先輩、ハル先輩の姿が見えなかった。よく探すと佳織ちゃんを宿めるマー坊先輩の姿はあった。でも、ハル先輩だけはどこをどう探しても、目を凝らしても、いない。

突然のことだった。香苗先輩がアンナ先輩の手をとり走り出したのだ。

「アンナ、行くよ！」

「え、行くよつて……きゃっ！」

「アンナだってハルに言いたいことあるでしょう！」

「ハルの奴……許さないんだからね」

香苗先輩の呟きを、オレは聞き逃さなかった。

やがて香苗先輩の後ろで、手を繋いだハル先輩とアンナ先輩がこちらに向かってくるのが見えた。……結局ハル先輩の想いは叶ったんだな……でも、それが卒業式だなんて酷すぎると思う。アンナ先

輩は遠くの高校に通うことになっているのだから。

そしてマー坊先輩と佳織ちゃんもやってきて、新旧生徒会役員が一堂に会した。実は、生徒会役員で写真を撮るのはいつも旧生徒会役員と新生徒会役員に分かれていたので、こうやって新旧メンバーで揃って写真を撮るのは最初で最後だったりするのだ。

「よし役者は揃ったね。じゃあ写真撮るよー！」

デジタルカメラのタイマーをセットして、香苗先輩が急いで列に戻る。

そして、新旧の生徒会役員たちが一枚の写真に納まった。

「じゃあ入学生歓迎の挨拶は夏岡君で決まりね。頑張って練習してね」

わが校初の女性議長に指令を受け、オレは去年マー坊先輩が務めた新入生歓迎の挨拶を任されることになった。ちなみに萌美ちゃんは吹奏楽部のほうが優先されるので、入学式前の準備と生徒会の仕事をダブルで背負うことになる。

新入生歓迎の挨拶の練習を終えて講堂から生徒会室に戻る途中、クラリネットを持った萌美ちゃんとすれ違った。どうやら今度は講堂で練習するらしい。

「無理すんなよ」

萌美ちゃんの頭をくしゃってやると、オレは何事もなかったかのようにその場を立ち去ろうとした、が、萌美ちゃんに呼び止められる。

「な、夏岡君……ありがとう」

顔を真っ赤にして、聞こえるか聞こえないかというほど小さな声で、萌美ちゃんはそう答えた。ちなみにオレと萌美ちゃんが付き合っていることは生徒会メンバー全員の公認である。

「相変わらず初々しいな」

手塚先生にぽんと肩を叩かれ、オレは苦笑せざるをえなかった。

そして、新入生を迎えて、第11回白鷺台中学校入学式は幕を開けたのである。

s i d e : T a s u k u f i n

元書記、新生徒会長の祐サイドから卒業式を見てみたらこうなりました。

最後まで影が薄かった彼ですが最後はバツチリキメていただこうと。萌美ちゃんとは……おそらくーっとの調子なんでしょうね。苦笑

次回で最終回、今度は萌美ちゃん視点での卒業式となります。どうかお楽しみに。

11月の生徒会役員選挙で、香苗先輩が私のために頑張ってくださいとおかげで、私は無事に生徒会副会長になることができました。夏岡君は、いつかハル先輩が「生徒会の柱になれるんじゃないかね？」と言っていた通りに生徒会長になり、更に雅弘先輩と付き合い始めた浅田佳織ちゃんや、その他新しいメンバーを加えて新しい生徒会事務局が誕生しました。

私たちの学校では生徒会長三大重要任務というものがあって、去年の春に雅弘先輩が務めた入学式での新入生歓迎の挨拶、生徒会役員選挙後の生徒総会での挨拶、そして、卒業式での送辞の3つです。授業や学年末試験の間を縫って、夏岡君は送辞の練習に明け暮れていました。一方の私も、吹奏楽部の練習が長引き、しばらくは一緒に帰れない状態が続いていました。それでも時々と一緒に帰ってお互いの近況報告をしたり、進路の話も本格的になってきて、その話をしたり。小説家を志して人文科を目指す夏岡君。一方の私は私立高校の衛星看護科を目指しています。同じ高校でないのは少し寂しいですが……。

「では、きょうの練習はここまでにしましょう」

「ありがとうございます！」

吹奏楽部は卒業式で国歌や校歌、入場や退場の音楽を担当することになっていきます。今日は行動での練習が行われ、練習を終えた私は同じ部活の友達と一緒に講堂をあとにしました。例年より早く咲き始めた桜が渡り廊下から見えます。少し寂しいですが、卒業式の日には散り始めてしまう、かも知れません。

そして、卒業式前日。3年生の元生徒会メンバーが全員第一志望の高校に合格したという吉報が、新生徒会メンバーの私たちの耳に

も届きました。

ですがそれは、楽しかった先輩たちとの生活にも終止符が打たれるということですよ。

不真面目そうに見えてやるときはやる、そんなマー坊先輩。まるで本当のお姉さんのように接してくれた香苗先輩。部活でも生徒会でもすごく真面目だったコウ先輩。気合と根性を合言葉に生徒会のムードメーカーとして活躍してくれたハル先輩。そして、人を好きになることの苦しみや喜びを教えてくれたアンナ先輩。

そんな先輩たちとも、これでお別れなんです。

翌日の卒業式。私はギャラリィ席で楽器のチューニングをしながら講堂を眺めました。在校生、卒業生のご家族、来賓の方や先生方が一堂に会しています。そこに、もうすぐ卒業生の皆さんが入場してくるのです。

「卒業生入場」

副校長先生の言葉と同時に、顧問の先生がタクトを構え、私たちは楽器を構え、そして演奏を始めました。やがて入場してきた先輩方が席に着き、卒業式の始まりを告げる挨拶、理事長や来賓の挨拶と、式はつつがなく続きます。

「送辞、在校生代表、夏岡祐」

「はい」

夏岡君が堂々と返事をして、しっかりとした足取りで壇上に上ります。

「三年生の先輩方、この度のご卒業おめでとうございます。特に先輩方には……」

送辞を読み上げていく夏岡君。生徒総会での新生徒会長の挨拶では、緊張してとんでもない挨拶になってしまっていたけれど、今はそんなことなど忘れさせるほどしっかりと役目を果たしています。

「今まで本当にありがとうございました。在校生代表、夏岡祐」

送辞を締めくくり、一瞬だけ講堂全体を見回す夏岡君。どんな思

いで先輩方の表情を見たのでしょうか。

「答辞、卒業生代表、穂積雅弘」

「はい！」

返事をして、完璧な所作で壇上に上る雅弘先輩。舞台に立ちなれている雅弘先輩、さすがです。

「答辞 例年より早い桜の開花が春を告げるこの佳き日、……」

これで、先輩方ともお別れなんだな……、不意にそんな思いが頭をよぎって、私は思わず涙を流していました。堂々と答辞を読み上げる雅弘先輩の姿に、涙が止まりませんでした。

「僕たちも、この学校の卒業生としての自覚と責任をもって、それぞれの人生を歩んでいきます。それでは3年間、本当にありがとうございます。卒業生代表、穂積雅弘」

でも、私にはやるべきことがあります。校歌斉唱、卒業生退場の音楽を、吹奏楽コンクールのときののように、ハル先輩のいつもも言っていた「気合と根性」をこめて演奏しました。

そして在校生や生徒会役員も退場……といったところで、私は遠藤先生と手塚先生に呼び止められました。そこには生徒会のメンバーが揃っています。何があったのか聞いてみると、

「これで先輩ともお別れだからな、是非やっておきたいことがある」
口火を切ったのは手塚先生。そして遠藤先生が携えているのはデジタル一眼レフカメラでした。ああ、そういうことなんだ、と私は納得しました。

「玄関の前に一番大きな桜の木があるだろう？あの下で新旧生徒会役員を集めて写真を撮ろう、と手塚先生と話していたんだ。卒業組には俺から香苗伝いに連絡を取ってもらうことにするよ」

「わかりました」

生徒会メンバーで撮る写真もこれが最後です。まして、新旧メンバー揃っての撮影は初めてのこと。

卒業生の下校時間に合わせて例の桜の木の下に集まった私たちですが、佳織ちゃん、雅弘先輩、ハル先輩の姿がありません。よく探すすと、泣きじゃくる佳織ちゃんを宥める雅弘先輩の姿は視界の隅に入ってきました。でも、ハル先輩だけはどこをどう探しても、目を凝らしても、いません。

まさか、ハル先輩は、アンナ先輩を……。

突然のことでした。香苗先輩がアンナ先輩の手をとり、ダッシュで校門の方へ向かったのです。

「アンナ、行くよ！」

「え、行くよつて……きゃっ！」

「アンナだってハルに言いたいことあるでしょう！」

「ハルの奴……許さないんだからね」

香苗先輩の眩きを聞き逃さなかったのは、おそらく私だけではないでしょう。

やがて香苗先輩の後ろで、手を繋いだハル先輩とアンナ先輩がこちらに向かってくるのが見えました。ハル先輩の想いは、この日になつてようやく叶ったんですね……。私まで目頭が熱くなりました。

そして雅弘先輩と佳織ちゃんもやってきて、新旧生徒会役員が一堂に会しました。最初で最後の新旧生徒会メンバーでの写真撮影です。

「よし役者は揃ったね。じゃあ写真撮るよー！」

デジタルカメラのタイマーをセットして、香苗先輩が急いで列に戻り、そして、新旧の生徒会役員たちが一枚の写真に納まったのです。

そして、4月。

私は生徒会の仕事と吹奏楽部の練習を同時にこなす忙しい合宿生活を送っていました。去年アンナ先輩がこなしていた生徒会便りの作成は、去年のデータを参考に佳織ちゃんが担当することになりました。

した。

新入生歓迎の挨拶の練習のあとに、講堂での吹奏楽部の練習があります。楽器を持って友達と歩いていると、遠藤先生や手塚先生、そして夏岡君とすれ違いました。

「無理すんなよ」

突然のことでした。いつもは「照れくさい」なんて言っただけのことではない夏岡君が、私の頭をくしゃっと少し乱暴に撫でると、何事もなかったかのようにその場を立ち去ろうとしました。でも、このままで済まされるのはちょっと寂しい。そう思った私は、夏岡君を呼び止めました。友達がいることも頭からすっかり飛んでいきます。

「な、夏岡君……ありがとう」

顔が真っ赤なのは自分でもわかります。あんまりにも恥ずかしくて、聞こえるか聞こえないかというほど小さな声で、夏岡君に感謝の気持ちを伝えました。ちなみに私と夏岡君が付き合っていることは学校中の公認だったりします。ちょっと、ううん、かなり恥ずかしいですけど……。

「もう、萌美ったら見せ付けてくれちゃって」

「そそ、そんなこと、ないよ……」

友達にからかわれて、思わずあたふたしてしまいました。

そして第11回入学式。新入生を迎えて、新しい1年が始まるうとしていました。

side: Moemi fin

卒業式&mp;後日談、最後は萌美ちゃん視点です。

夏岡君とのからみがどうしても欲しかったのでラストはあんなふう
になっています。

佳織ちゃん以外の新生徒会メンバーの影が薄すぎたかな、と今とな
っては後悔、です。

ともあれ、長かったこの連載もこれで最終回となります。
読んでいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9841p/>

私立白鷺台中学校・生徒会裏日誌

2011年4月27日19時25分発行